

平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、施設整備事業に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

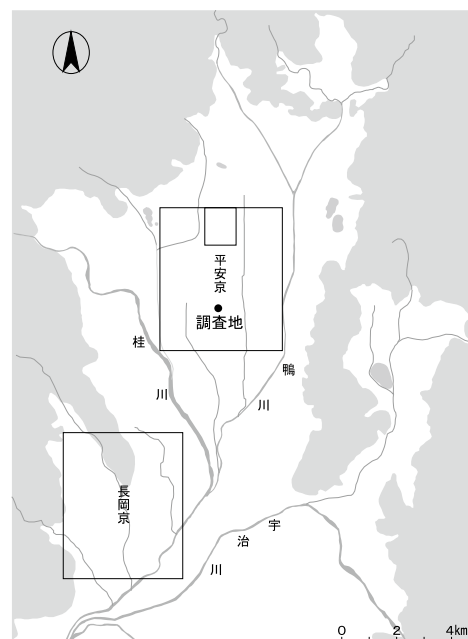
令和7年2月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | | |
|----|---------|---|
| 1 | 遺 跡 名 | 平安京跡・御土居跡（京都市番号 23 H 102） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市下京区朱雀分木町19番2の一部 他
（京都市中央卸売市場 関連5号棟跡地） |
| 3 | 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 | 調 査 期 間 | 2023年9月25日～2024年1月31日 |
| 5 | 調 査 面 積 | 583㎡ |
| 6 | 調査担当者 | 小檜山一良・松吉祐希・布川豊治・渡邊都季哉 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 | 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」、木製品は「木」、金属製品は「金」を前に付けた。 |
| 13 | 本書作成 | 小檜山一良：1～4、5－（1）
松吉祐希：5－（2）
岡田麻衣子：4－（3）
付章1：関 晃史（当研究所）・丸山真史（東海大学人文学部）
付章2：株式会社パレオ・ラボ |
| 14 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員及び
資料業務職員が当たった。 |



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の方法と経過	2
2. 遺 跡	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構	9
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類・土製品	11
(3) 木製品	12
(4) 銭貨・金属製品	17
(5) 動植物遺存体	17
5. ま と め	18
(1) 調査の概要	18
(2) 御土居の堀	18
付章1 御土居の堀跡出土の動物遺存体と大型植物遺体	28
付章2 御土居の堀跡堆積物の珪藻分析	33

図 版 目 次

図版 1	遺構	調査区平面図（1：200）
図版 2	遺構	1 区西壁断面図 1（1：60）
図版 3	遺構	1 区西壁断面図 2（1：60）
図版 4	遺構	1 区北セクション断面図（1：60）
図版 5	遺構	2 区南壁断面図（1：60）
図版 6	遺構	2 区・3 区東壁断面図 1（1：60）
図版 7	遺構	2 区・3 区東壁断面図 2（1：60）
図版 8	遺構	3 区南壁断面図（1：60）
図版 9	遺物	木製品実測図 1（1：2）
図版 10	遺物	木製品実測図 2（1：3）
図版 11	遺物	木製品実測図 3（1：3）
図版 12	遺物	木製品実測図 4（1：3）
図版 13	遺物	木製品実測図 5（1：3）
図版 14	遺物	木製品実測図 6（1：3）
図版 15	遺構	1 1 区全景（北から） 2 1 区畝状高まり（北東から）
図版 16	遺構	1 1 区北セクション断面（南から） 2 2 区全景（北から）
図版 17	遺構	1 2 区畝状高まり（北西から） 2 2 区畝状高まり（西から） 3 2 区畝状高まり（西から）
図版 18	遺構	1 3 区全景（北から） 2 3 区畝状高まり（西から） 3 3 区堀 1 西肩（北東から）
図版 19	遺物	土器類・木製品 1
図版 20	遺物	木製品 2
図版 21	遺物	木簡赤外線写真 1
図版 22	遺物	木簡赤外線写真 2

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	1区調査前全景（南から）	3
図4	1区重機掘削状況（北から）	3
図5	1区作業状況（南東から）	3
図6	2区調査前全景（南から）	3
図7	3区調査前全景（北から）	3
図8	中学生チャレンジ体験（南から）	3
図9	親子発掘体験（東から）	3
図10	広報発表（北から）	3
図11	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図12	基本層序柱状図（1：50）	9
図13	土器・土製品実測図（1：4）	12
図14	銭貨拓影（1：2）、金属製品実測図（1：4）	17
図15	堀埋土の層序区分対応図	19
図16	調査地周辺の『京都惣曲輪御土居絵図』	20
図17	調査地周辺の御土居の堀の復元ライン（1：4,000）	20
図18	御土居主要調査地点位置図（1：40,000）	22
図19	調査地周辺における堀の畝状高まり（1：400）	24

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	6
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	11
表4	御土居主要調査一覧表	23

付 表 目 次

付表1	木製品一覧表	41
-----	--------	----

平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

調査地は、京都市下京区朱雀分木町19番2の一部他(京都市中央卸売市場関連5号棟跡地)に所在しており、平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡にあたる(図1)。

当地に京都市中央卸売市場第一市場施設整備事業が計画され、2023年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」という)が試掘調査を実施し、御土居の堀を検出している。これにより、文化財保護課から原因者に対し発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、1面の遺構面を想定し、御土居の堀の検出、それに伴う遺物の確認を目的とした。

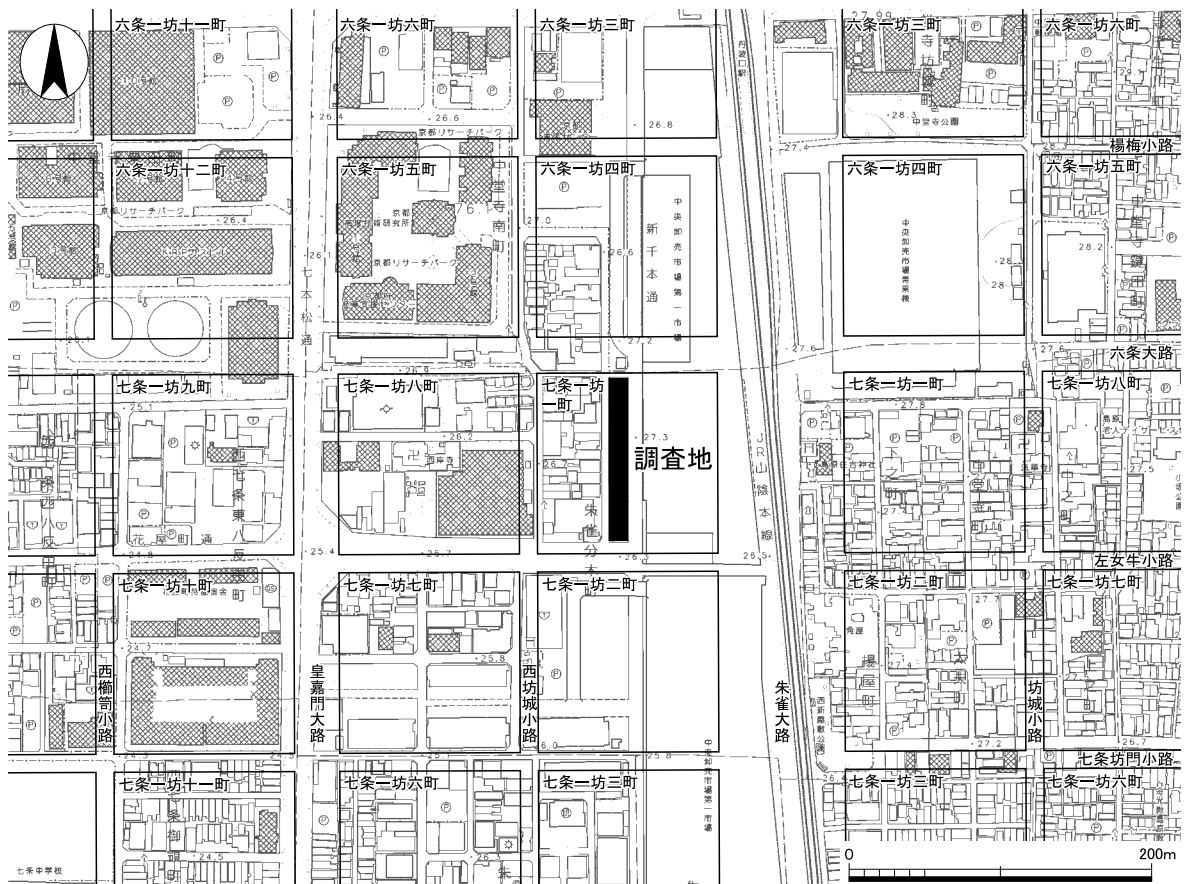


図1 調査地位置図 (1:5,000)

(2) 調査の方法と経過 (図2～10)

調査区は文化財保護課の指導の下、敷地内北部に1区、南部に2区・3区を設定した。調査面積は1区：7.8m×35.3m、2区：7.8m×18.6m、3区：7.8m×20.8m、計約583㎡となった。調査

は1区から開始し、2区、3区の順に行った。

2023年10月2日から1区の重機掘削を開始した。地表下約1.6m（標高約24.7m）で御土居の堀を検出し、遺構の掘削は人力で行った。1～3区で、御土居の堀底部、3区では堀の西肩付近を検出した。調査中の排土は、敷地内に仮置きした。各調査区とも調査後に重機により埋戻しを実施した。2024年1月31日にすべての調査を終了し、撤収した。

遺構の記録は、オルソ測量を含む実測図を作成し、随時写真撮影を行った。

調査中は適時、文化財保護課の検査・指導を受けた。11月18日・12月11日には、検証委員の滋賀県立大学佐藤亜聖氏の検証を受けた。

普及啓発事業として、2023年11月8日に中学生チャレンジ体験、11月11日に親子発掘体験を現場で受け入れた。また、12月20日には調査成果を広報発表した。

調査と整理に当たっては下記の方々から御指導・御教示を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）

網 伸也、市川 創、岩崎奈緒子、江浦洋、岡寺 良、尾下成敏、國下多美樹、鋤柄俊夫、高田 徹、谷 徹也、辻 康男、戸塚和美、中居和志、中井 均、中西裕樹、中村武生、西山良平、平尾政幸、福島克彦、松井一明、森島康雄、横田冬彦

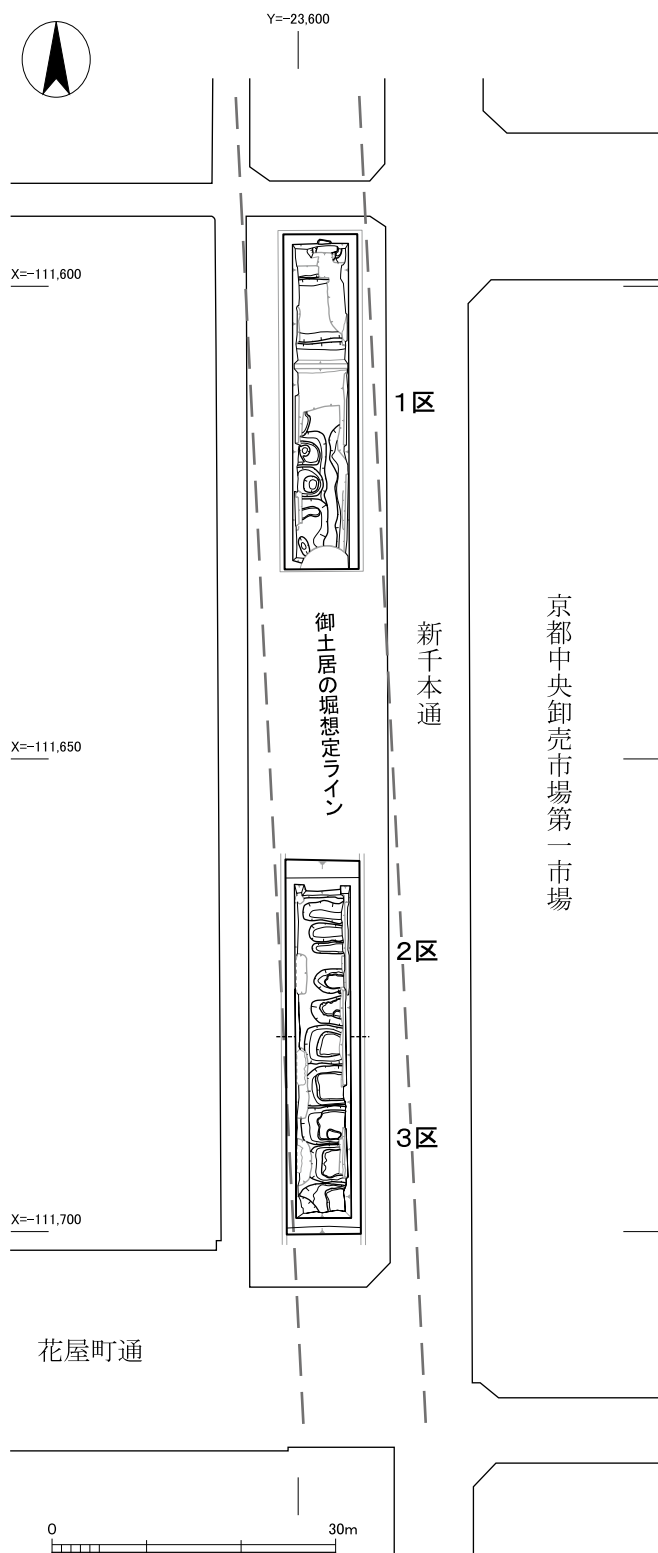


図2 調査区配置図 (1 : 800)



図3 1区調査前全景（南から）



図4 1区重機掘削状況（北から）



図5 1区作業状況（南東から）



図6 2区調査前全景（南から）



図7 3区調査前全景（北から）



図8 中学生チャレンジ体験（南から）



図9 親子発掘体験（東から）



図10 広報発表（北から）

2. 遺 跡

(1) 歴史的環境と立地

調査地は、平安京跡・御土居跡にあたる。北側の1区は、平安京右京七条一坊一町跡の北部中央、南側の2・3区が南部中央にあたる。いずれも東側が朱雀大路に面した坊城の地で、北を六条大路、西を西坊城小路、南を左女牛小路に画される。

調査地である右京七条一坊は、史料によると、三・四町、九・十町、十三・十四町で施設利用が確認できるが、今回調査区が位置する一町の居住者は不明である。三・四町には『拾芥抄』西京図によれば、外国使節を迎えるための西鴻臚館が存在している。九・十町には、11世紀に権中納言源経信の所領が存在した。また、十三・十四町の両町は『拾芥抄』西京図によれば、西市の外町であった。

御土居は、天正19年(1591)に豊臣秀吉によって築かれ、洛中を囲む土塁と堀によって構成される。東は鴨川、西は紙屋川、北は鷹峯、南は東寺に至る東西約3.5km、南北約8.5km、総延長22.5kmにわたる。今回の調査区は、御土居の堀の西辺南部にあたる。なお、「御土居」という呼称が定着したとされるのが江戸時代で、築造当時は「土居堀」・「惣堀」・「京廻ノ堤」などと称されていた。

(2) 周辺の調査(図11、表1)

調査地周辺では、これまでに中央市場やその西側に広がる京都市サーチパークの開発、北に通る五条通の拡幅に伴い、多くの調査が行われてきた。

周辺では、西坊城小路より西側では、縄文時代から古墳時代の川や湿地が検出されていた。今回の調査地南側では古墳時代から奈良時代の流路が初めて検出された(SM5)。

平安時代前期の遺構としては、調査区の東側で、朱雀大路西側溝、路面、七条坊門小路北側溝が検出されている(SM6)。西側では、皇嘉門大路の東側溝、築地溝が検出されている(XD1)。北側に当たる右京六条一坊三町や、北西方向の六町でも掘立柱建物、井戸、土坑が検出されている(XF8・13, SM10・14・15)。南西方向の七町では、皇嘉門大路東側溝、築地跡、内溝が検出されている(SM11)。同じ南西方向の十五町では、掘立柱建物、柵、井戸、西櫛笥小路西側溝が検出されている(YN1)。北西に位置する右京六条一坊五町では、1町の4分の3ほどが調査されている(XF2)。この調査では、大規模な掘立柱建物群や井戸を検出しており、1町規模の邸宅の存在が明らかとなっている。また、右京六条一坊十一・十二・十三・十四町では、掘立柱建物や門、柵、井戸を検出しており、4分の1町から半町ほどの中規模邸宅があったと考えられる。このように、調査地周辺は平安時代前期には大・中規模の比較的大きな邸宅が存在していたが、平安時代中期になるとほとんど遺構が確認されず、周辺は衰退したようである。

その後、平安時代後期から鎌倉時代になると、皇嘉門大路の東側では再開発が行われたようで、

楊梅小路や西坊城小路の側溝が掘削され（XF7・8・10・13・14・17・18、SM10）、右京六条一坊三・五町では井戸や楊梅小路に開く門（XF2、SM10）を、六条一坊二・三町では掘立柱建物（SM5）を、六条一坊五町では多数の井戸（XF2）を、六条一坊六町では掘立柱建物や井戸、地業や御堂、楊梅小路に開く門、園池、（XF2・8・9・19）を検出している。七条一坊一・二町間では、左女牛小路南北両側溝、朱雀大路西側溝を検出している（SM6）。七条一坊九町北では、鎌倉時代の六条大路路面を検出している（調査XF20）。一方で、平安時代前期には建物が数多く確認されていた右京六条一坊十一・十二・十三・十四町では、顕著な遺構は検出されていない。

室町時代以降は、耕作地化したと考えられ、耕作に伴う溝（SM10）や、井戸（SM1・2）などを検出している。

安土桃山時代には、天正19年（1591）に、豊臣秀吉により御土居が右京六条一坊二・三・四町、七条一坊一町を縦断する形で築かれる。御土居の堀はXF13・17、SM5・14・15で確認されている。御土居の堀埋没後は、近世から現代に至るまで耕作地となったようで、芹・水菜や地名を冠された「中堂寺大根」などの蔬菜の生産が行われていたようである。¹⁾

近代に入ると、明治40年（1907）調査地の西側に島原競馬場、明治42年（1909）北西側に大阪瓦斯京都工場が建設される。昭和2年（1927）には京都中央卸売市場が建設され、調査地はその一部となり、現在にいたる。

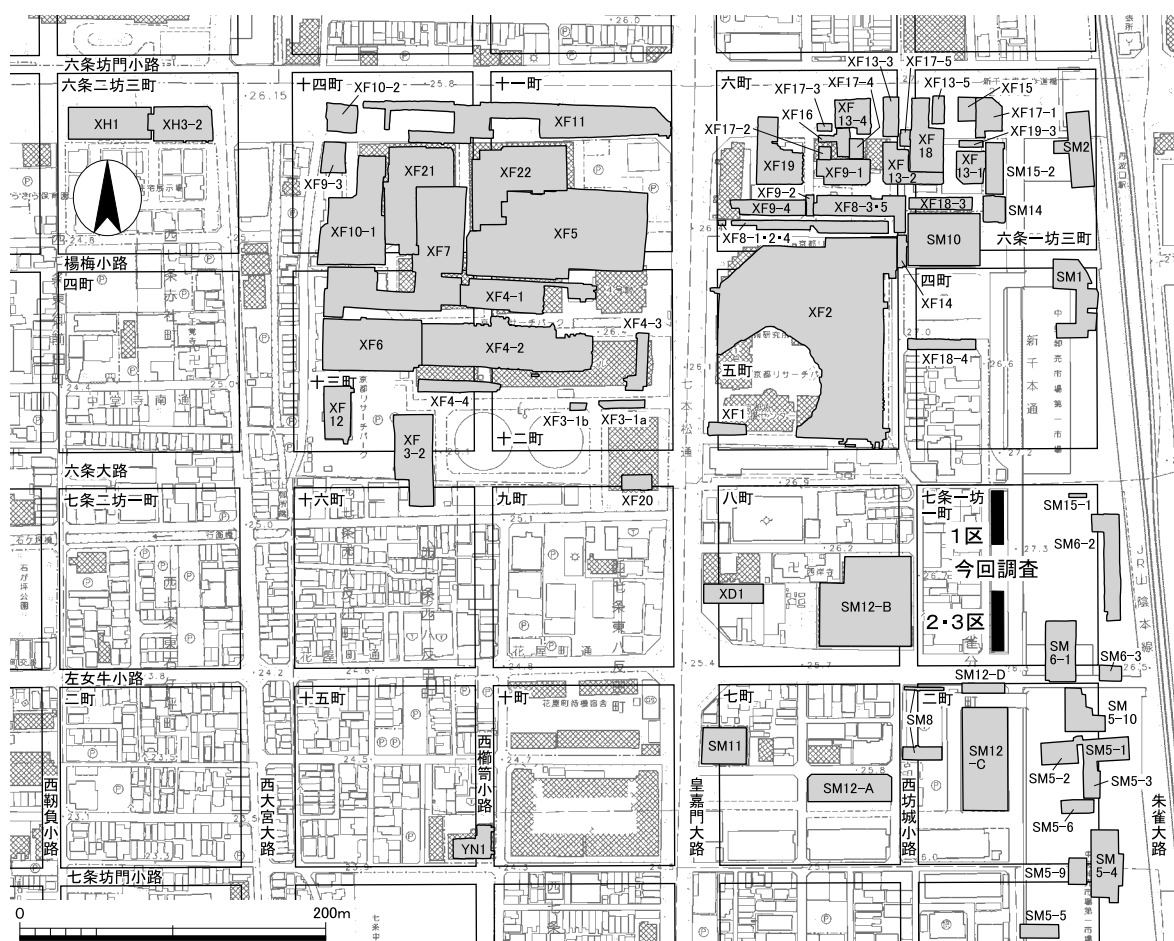


図11 周辺調査位置図（1：5,000）

表1 周辺調査一覧表

調査 記号	条坊町名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	主な成果	文献 番号
SM 1・2	六条一坊三町・ 四町	中堂寺南町	1979.03.10 ～06.11	2,000	[平安時代後期] 溝 [室町時代] 井戸	1
XD1	七条一坊八町	朱雀分木町47	1983.05.10 ～05.24	247	[平安時代前期] 皇嘉門大路東側溝、築地溝、掘立柱建物 [室町時代] 土坑	2
SM5	七条一坊二・三 町	朱雀分木町	1984.07.12 ～10.20	3,000	[古墳時代～奈良時代] 流路 [平安時代] 朱雀大路西側溝、路面、七条坊門小路北側溝 [鎌倉時代] 建物 [近世] 井戸、溝、御土居堀	3
SM6	七条一坊一町	朱雀分木町	1986.08.25 ～10.23	1,730	[平安時代後期] 左女牛小路西側溝、朱雀大路西側溝 [江戸時代後期] 土取り穴	4
XF1	六条一坊五町	中堂寺南町17他	1987.08.03 ～08.04	55	[平安時代末～鎌倉時代前期] 皇嘉門大路東側溝	5
XF2	六条一坊五町	中堂寺南町	1987.09.16 ～1988.04.21	9,646	[平安時代前期] 掘立柱建物、井戸、皇嘉門大路東側溝 [平安時代後期～鎌倉時代] 掘立柱建物、井戸、門	6
XF3	六条一坊十二町 ・十三町、七条 一坊十六町	中堂寺栗田町1	1987.03.28 ～1989.06.07	1,610	[縄文時代～古墳時代] 湿地 [平安時代] 六条大路北側溝	7
XF4	六条一坊十二町 ・十三町	中堂寺栗田町1	1989.07.20 ～1990.05.30	5,670	[平安時代] 掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路東側溝 [平安時代末～鎌倉時代] 西櫛笥小路西側溝	8
XF5	六条一坊十一町	中堂寺栗田町	1991.02.12 ～6.19	6,050	[平安時代] 掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路西側溝	9
XF6	六条一坊十三町	中堂寺栗田町1	1991.11.18 ～1992.03.07	2,000	[縄文時代～弥生時代] 流路 [平安時代] 掘立柱建物、井戸、溝	10
XF7	六条一坊十三町 ・十四町	中堂寺栗田町1	1992.07.13 ～1993.01.14	3,805	[縄文時代～弥生時代、古墳時代] 流路 [平安時代] 楊梅小路路面、南北両側溝、掘立柱建物	11
XF8	六条一坊六町	中堂寺南町	1993.08.07 ～1994.03.24	1,400	[縄文時代～古墳時代] 湿地 [平安時代前期] 掘立柱建物、井戸 [平安時代後期～鎌倉時代] 掘立柱建物、井戸、池跡、 西坊城小路西側溝	12
XF9	六条一坊六町・ 十四町	中堂寺南町地内	1994.04.18 ～08.31	1,247	[縄文時代～古墳時代] 湿地 [平安時代後期～鎌倉時代] 井戸、池跡、溝	12
XF10	六条一坊十四町	中堂寺栗田町地内	1994.08.29 ～1995.02.24	2,770	[古墳時代～平安時代後期] 川跡 [平安時代前期] 井戸、掘立柱建物、楊梅小路北側溝	12
XF11	六条一坊十一町 ・十四町	中堂寺栗田町地内	1995.04.10 ～12.01	3,320	[縄文時代～古墳時代] 川跡 [平安時代前期] 掘立柱建物、井戸	12
XF12	六条一坊十三町	中堂寺栗田町地内	1996.09.02 ～12.28	650	[平安時代前期] 池、掘立柱建物	13
XF13	六条一坊三町・ 六町	中堂寺南町地内	1997.07.13 ～12.19	1,894	[平安時代前期] 掘立柱建物 [鎌倉時代] 池、井戸、西坊城小路側溝 [江戸時代] 御土居堀	12
XF14	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1998.10.26 ～12.04	120	[平安時代後期] 井戸、西坊城小路西側溝 [鎌倉時代] 西坊城小路西側溝	12
XF15	六条一坊三町	中堂寺南町地内	1999.01.29 ～03.10	210	[平安時代後期] 井戸	12
XF16	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1999.09.26 ～10.26	230	土取り跡	12
XF17	六条一坊三町・ 六町	中堂寺南町地内	2000.01.18 ～04.06	627	[平安時代末～鎌倉時代] 西坊城小路西側溝 [江戸時代] 御土居堀	12
XF18	六条一坊三町・ 四町	中堂寺南町地内	2000.04.09 ～10.05	1,385	[平安時代末～鎌倉時代] 西坊城小路東側溝	12
XF19	六条一坊六町	中堂寺南町地内	2001.12.03 ～2002.05.23	1,058	[平安時代以前] 川 [鎌倉時代] 建物(御堂)、池跡 [江戸時代] 御土居堀	12
XF20	七条一坊九町	中堂寺栗田町93・ 94	2006.02.01 ～02.24	200	[鎌倉時代] 六条大路路面	14
XH1	六条二坊三町	西七条東御前田町 地内	2006.11.28 ～2007.03.16	1,160	[古墳時代] 流路 [平安時代] 池、埋納土坑、柵、溝など	15
SM8	七条一坊二町	朱雀分木町地内	2007.07.02 ～08.13	278	[平安時代] 西坊城小路東側溝、柱穴 [安土桃山時代] 土坑 [江戸時代] 土坑	16

調査 記号	条坊町名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	主な成果	文献 番号
XH3-2	六条二坊三町	西七条東御前町 地内	2007.08.21 ～12.21	840	[弥生時代] 流路 [平安時代前期] 掘立柱建物、溝、埋納土坑など	17
SM10	六条一坊三町	中堂寺南町地内	2008.05.08 ～09.18	1,670	[平安時代前～中期] 掘立柱建物 [平安時代後期～鎌倉時代] 西坊城小路東側溝、楊梅小 路北溝、門、井戸 [室町時代] 溝 [江戸時代] 土取土坑	18
XF21	六条一坊十四町	中堂寺栗田町地内	2008.10.03 ～2009.03.19	1,950	[弥生時代] 溝 [平安時代前期] 建物、門、柵、溝 [平安時代後期] 落ち込み、溝	19
YN1	七条一坊十五町	西七条西八反田町 129-1	2009.01.05 ～02.19	418	[奈良時代以前] 流路 [平安時代前期～中期] 掘立柱建物、柵、井戸、水利施 設、流路、西櫛笥小路西側溝	20
SM11	七条一坊七町	朱雀分木町60	2016.02.01 ～04.28	747	[弥生時代～古墳時代] 流路、土坑 [平安時代] 皇嘉門大路東側溝、築地跡、内溝 [中世～近世] 耕作溝 [近世] 土坑	21
SM12	七条一坊八町	朱雀分木町	2016.05.09 ～2017.07.27	4,352	[平安時代] 掘立柱建物 [鎌倉時代] 石組井戸 [安土桃山時代] 御土居堀	22
XF22	六条一坊十一町	中堂寺栗田町地内	2018.07.17 ～11.05	2,390	[平安時代] 溝 [平安時代末～鎌倉時代] 溝	23
SM14	六条一坊三町	中堂寺南町 130番地1の一部	2021.01.18 ～03.04	240	[平安時代] 井戸 [江戸時代] 御土居堀	24
SM15	六条一坊三町・ 七条一坊一町	中堂寺南町130-1 の一部	2022.01.18 ～03.31	422	[安土桃山時代] 御土居の土塁基底部、犬走り、堀、 堀には東西・南北方向の畝状高まり	25
SM16	七条一坊一町	朱雀分木町19-2 の一部	2023.09.25 ～2024.01.31	600	今回の調査	本 報告

※ 調査記号 SMは京都市中央卸売市場関連、XFは大阪ガス京都工場跡地・リサーチパーク関連、XHは五条通拡幅工事関連の調査。

註

- 1) 「大内村」『史料 京都の歴史』第12巻 下京区 平凡社 1981年

文献一覧（表1 周辺調査一覧表）

- 1 網 伸也「平安京右京六条一坊三・四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2 本 弥八郎・菅田 薫「右京七条一坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 3 平尾政幸・本 弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 4 平尾政幸・加納敬二「平安京右京七条一坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 5 小森俊寛「平安京右京六条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6 梅川光隆・杉山信三ほか『平安京右京六条一坊 - 平安時代前期邸宅跡の調査 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 7 長宗繁一「平安京右京六・七条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

- 8 長宗繁「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 9 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 10 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 11 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002 - 6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 13 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 14 平尾政幸『平安京右京七条一坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005 - 12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 15 小檜山一良・卜田健司『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 - 25 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 16 内田好昭・加納敬二『平安京右京七条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007 - 6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 17 小檜山一良ほか『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007 - 14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 18 布川豊治ほか『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 - 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 19 南 孝雄『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 - 22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 20 津々池惣一・小檜山一良『平安京右京七条一坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 - 19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 21 東 洋一・柏田有香『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016 - 2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 22 柏田有香ほか『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017 - 13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 23 松永修平『平安京右京六条一坊十一・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018 - 9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 24 柏田有香『平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020 - 8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年
- 25 松吉祐希『平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021 - 15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図12)

調査区は1～3区で、北側の1区と南側の2・3区は南北に約30m離れている。調査区(1～3区)の東辺と西辺には、深さ約1.4mの建物の基礎(コンクリート擁壁)が埋没しており、このコンクリート擁壁を壁面として、その内部を調査した。調査区全面で堀1を確認している。

調査地の基本層序は上から、コンクリート擁壁(厚さ約1.4m)、近現代の造成土(I層:厚さ約0.05～0.15cm)、近世から近代の耕作土(II層:厚さ0.1～0.2m)、堀1の埋土(III層:厚さ1.0～1.8m)、基盤層(IV層)である。3区では近現代の造成土を確認できなかった。2・3区の現地表面の標高は、1区よりも約0.4m低く、調査地は全体的に南に傾斜している。

(2) 遺構 (図版1～8・15～18)

堀1 1～3区で検出した御土居の堀である。1区は周辺調査の成果などから堀の中央部とみられ、3区では堀の西肩法面を検出した。東肩部は、以前の調査成果から調査区外の5～6m東側と考えられる。

堀の幅は東西7.8m以上で、南北約77m分を検出した。北でやや西に振れる傾きをもつ。3区南部で検出した堀の西肩法面は、地山の粗砂層を掘り下げて形成されており、斜度はおおよそ30度

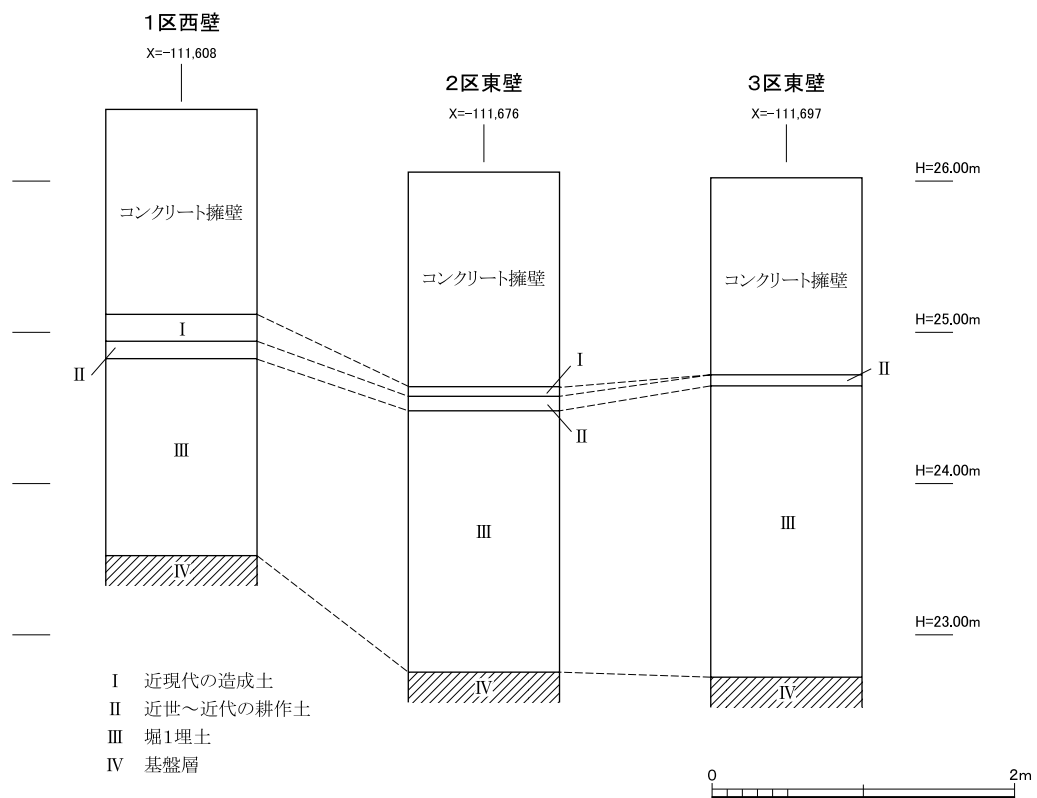


図12 基本層序柱状図 (1:50)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
安土桃山時代～江戸時代	堀 1	御土居の堀

であった。粗砂層が崩れて堀に流れ込んでいる状況も明らかになった。

堀の底面には凹凸がある。また、堀の底面には南北・東西方向に地山の粗砂・砂礫層を掘り残して形成された畝状の高まりを検出した。畝状高まりは、1区では東西方向に5条、南北方向は1条、2区では東西方向に6条、3区では、東西方向に4条確認した。畝状高まりは、断面はカマボコ形を呈しており、上面幅0.2～2.0m、下面幅0.8～4.0mで、高さ0.2～1.0mである。東西方向の畝状高まりの間隔は、1区南半と2・3区の2.0～4.0mの比較的狭い部分と1区北半の約7mの広い部分とにわかれる。堀の深さは最深部で約1.8m、畝状高まりの頂部までは1.0mと、場所によって異なる。

堀の埋土は、大きく3層（上層、中層、下層）に分けられる。2・3区では、下層は堀の底部から畝状高まりのおよそ上面までの厚さ0.5～0.7m、中層は畝状高まりの上面から木製品をやや多く含む黒色粘土層までの厚さ0.7～1.1m、上層は木製品を多量に含む黒色腐植土から耕作土層下面までの厚さ0.2～0.3mである（図版6・7 2区・3区東壁）。下層では、畝状高まりの裾部や堀底部に、粘土～細砂（東壁23・24、37・38層）を確認した。これらは掘削直後の初期堆積とみられる。基盤層と堀1埋土との境界には、にぶい黄橙色～灰黄褐色のシルト～粘土（図版2・3－35層、図版4－15層、図版5－22層、図版6・7－32層）が堀の底面を覆うように薄く堆積していた。これは、地中の地下水位が近現代に低下することで、粗砂・砂礫からなる基盤層が空気に触れ酸化、粘土からなる埋土との層界に鉄分が沈着し硬化したものとみられる。

東西方向の畝状高まりには、修復痕が確認された部分がある（東壁33層）。畝状高まりの頂部を除く両斜面には、粘土ブロックを含んだ砂礫層が裾部にかけて厚くなるように貼り付けられている。掘削後の間もない時期に水の浸食により崩れた部分を補修していた。畝状高まりの間の凹みには、畝状高まり頂部が埋まるほど厚くオリーブ黒色粘土や黒褐色粘土（東壁13～17層）が堆積する。中層では、畝状高まりはほぼ確認できない状態となり、その上面に砂や粘土（東壁5～8層）が堆積する。8層の細砂層は上流からの流れ込みと考えられる。上層では、木製品を多量に含む腐植土層が堆積し、堀はほぼ埋没する（東壁3・4層）。自然科学分析によると、5・6層と9層の間に堀内の水域環境に変化が生じた結果、水位が上昇した可能性がある（付章2参照）。このことから水位は徐々に上がっていったとみられる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要（表3）

今回の調査では、遺物整理用コンテナ52箱分の遺物が出土した。内訳は、土器類・土製品・瓦類が24箱、木製品・金属製品・動植物遺存体などが28箱である。

遺物の大半が堀1から出土した。堀1の上・中層からは木製品が多量に出土したが、下層からは木製品・土器類ともに出土量は少なかった。また、土器類・瓦類は、江戸時代のものは少量で、小片ではあるが平安時代前期のものが多くを占めている。

土器類には、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・青磁がある。平安時代の土器類は、ほとんどが堀1からの出土で混入品である。

瓦類には、丸瓦・平瓦がある。

木製品には、木簡・漆器椀・箸・皿・容器・櫛・人形・毯・木栓・下駄・付札・部材・用途不明品など多くの種類がある。

金属製品には、銭貨・剣がある。

動植物遺存体には、骨・貝・種実・竹などがある。

以下、遺物の種類ごとに概要を述べる。出土土器の時期は、平尾政幸氏の編年¹⁾に拠る。

(2) 土器類・土製品（図版19、図13）

堀1出土土器・土製品（1～6） 1は土師器皿Sである。口径10.5cm、器高2.1cm。内面底部に凹線状の圏線がある。口縁部内外面ともにナデ調整、外面底部はオサエ調整である。11C段階とみられる。2区上層から出土。

2・3は青磁である。2は椀である。器高7.0cm。高台の断面形はやや縦長の逆台形である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。体部下半は無釉で、釉の色調は灰白色を呈す

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、 灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶 磁器、瓦類				
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施 釉陶器、染付磁器、青磁、瓦 類、土製品、木製品、銭貨、 金属製品、石製品、動植物遺 存体		土師器1点、施釉陶器1点、 染付磁器1点、青磁2点、土 製品1点、木製品102点、金属 製品2点、骨・貝		
合 計		72箱	110点（12箱）	8箱	52箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

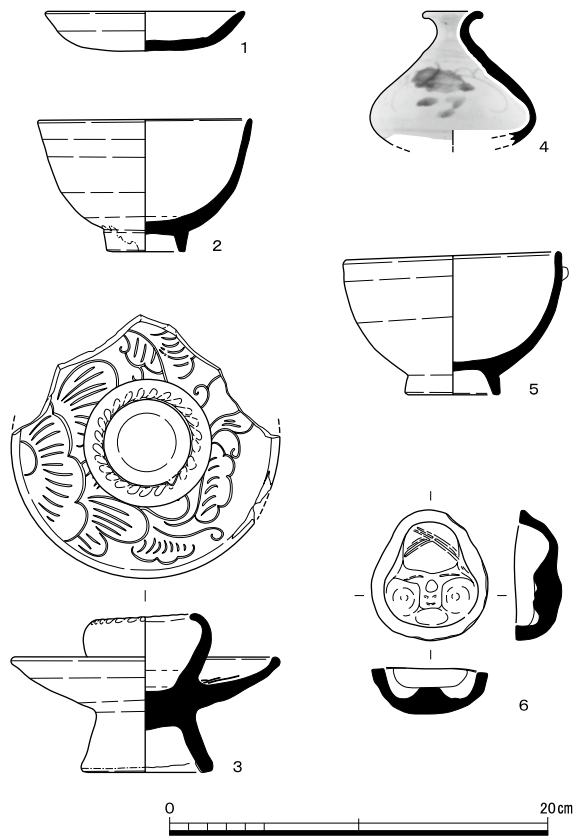


図13 土器・土製品実測図（1：4）

る。3は天目台である。口径5.2cm、皿部径13.8cm、底部径6.0cm、器高9.4cm。脚部は内傾気味に立ち上がる。皿部は浅手で、端部は肥厚する。天目碗をのせる受け部は、口縁部が大きく内傾して、端部は丸く収まる。受け部の上端にはヘラによる凹凸の装飾を施す。皿状の内面底部には花文の陰刻を施す。高台底面以外に施釉する。釉の色調は明緑灰色を呈する。高台端内側にはハナレ砂が残る。17世紀中期とみられる。ともに波佐見の製品である。2は2区上層、3は1区下層から出土。

4は染付磁器瓶である。残存高7.1cm。底部を欠損する。いわゆる油壺である。胴部最大径が低い位置にあり、内径しながら立ち上がる。頸部は細く狭まり、口縁部は大きく外反する。体部外面に呉須で簡易な草文を描く。内面には漆が付着する。17世紀中期以降とみられる。肥前産。2区上層から出土。

5は施釉陶器碗である。器高7.6cm。高台から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近では上方に伸びる。体部外面には、重ね焼きの痕跡が残る。高台底面以外に施釉する。高台端内側にはハナレ砂が残る。釉の色調はにぶい黄褐色を呈する。唐津。17世紀末から18世紀前半とみられる。2区上層から出土。

6は土製品である。おたふく面の型である。額・顎・頬骨が大きく凹み、目は細く表現される。長さ6.9cm、幅6.1cm、厚さ2.5cm。胎土は精良でにぶい黄橙色。伏見産。2区上層から出土。

（3）木製品（図版9～14・19～22、付表1）

木製品は、木筒・栓・櫛・蓋・碗・皿・棒などの生活に関するもの、人形・棕櫚箒・篋・刷毛など生産に関するもの、その他用途不明など多量に出土した。すべて堀1からの出土であり、特に上・中層からの出土が多い。これらは堀に廃棄されたものや別の場所で廃棄され、流されてきたものと考えられる。

木1は墨書のある容器底板で、外周側面には面取り状の傾斜がある。外面に2列で「×□□□^{〔山カ〕}×基也」と記される。

木2～15は木筒である。そのうち短冊状のものが木2・3～5・7・11～15の10点、蒲鉾板状のものが木6の1点、棒状のものが木8・9・10の3点。木取りは板取りと柁目取りのものと様々であるが、全ての木筒は表面を削り出し、丁寧に調整している。

木簡釈文

木 1

× □ □ □
 〓
 〓
 〓
 × 基 也

径72×厚さ6 061

木 2

× □^(延) □^(寺)

(32)×18×2 081

木 3

□ 十 一 月

(93)×(27)×2 081

木 4

× □ □^(二) 百 卅 入

(106)×35×4 081

木 5

○
 ○ □ □^(一)

(109)×30×6 081

木 6

「 仁 儀 禮 智 信 」

104×45×12 011

木 7

□ □ □ □

(118)×(13)×2 081

木 8

(文字不明)

(75)×8×5 065

木 9

(文字不明)

(183)×(13)×8 065

木 10

・ (文字不明)

・ 「 ○ □ □ □^(院) □ □ 」

・ 「 南 □ □ □ □ □^(阿) 」

・ (文字不明)

(134)×13×11 065

木 11

「 √ □ □ □^(養) 生 主 水 」

139×26×6 032

木 12

「 □ □ □^(平) □ □ 」

(128)×(22)×3 019

木 13

・ 「 ○ い た 〃 や □^(通) 兵 ぐ 」

・ 「 ○ 八 十 文 」

149×25×4 011

木 14

・ □ □^(傳) 十 郎

・ □

(133)×28×5 019

木 15

・ 「 「 ○ 八 右 衛 門 」

・ 「 「 □ □ □ □ 」

(127)×23×8 011

墨書の記述や型式については、『木簡学会』の凡例に従う。

木2は、片面に「× □ □」^{〔延カ〕〔寺カ〕}と墨書が確認できる。両端部は欠損する。

木3は、片面に「□十二月」と墨書が確認できる。両端部は欠損する。他のものと比べ、薄い。削り出されたものか。

木4は、片面に「× □ □ 百卅入」^{〔二カ〕}と墨書が確認できる。両端部は欠損する。

木5は、片面に円で囲んだ「□ □」^{〔一カ〕}と墨書が確認できる。両端部と片側が欠損する。上部・下部と円内に各1箇所の穿孔があり、上部の小孔には木釘が残存している。

木6は、片面に儒教思想の概念である「仁儀禮智信」と墨書が施される。文字の上端と下端には文字を書く目安のような毛引き線が施され、墨書の上から両面に刃痕が格子状に残る。他のものよりも厚さが1.2cmと厚めである。

木7は、片面に「□□□□」と墨書が確認できる。両端部と片側が欠損する。

木8は、片面に墨書が確認できるが、文字は判読できない。片端部は欠損し、両側は木目に沿って欠損している。

木9は、片面に墨書が確認できるが、文字は判読できない。両端部と両側が欠損する。

木10は、「文字不明」^{〔院カ〕}「□ □ □ □ □」^{〔阿カ〕}「南 □ □ □ □ □」^{〔阿カ〕}「文字不明」と4面に墨書が確認できる。下端部は欠損し、上部には小孔を穿つ。

木11は、片面に「□ □ □ 生主水」^{〔義カ〕}と墨書が確認できる。ほぼ完存状態である。四隅をやや丸くし、上端部左右に切り込みが施される。切り込み部分には、紐を縛った痕が残る。

木12は、片面に「□ □ □ □ □」^{〔打カ〕}と墨書が確認できる。下端部と片側は欠損し、上部の角を切る。

木13は、両面に「いたミや □ 兵へ」^{〔満カ〕}「八十文」と墨書が確認できる。「屋号と名前」「値段」か。下端部の一部が欠損するが、ほぼ完存する。上部に1箇所小孔を穿つ。

木14は、両面に「□ □ 十郎」^{〔専カ〕}「□」の墨書が確認できる。上端部が欠損する。

木15は、両面に「ㄗ八右衛門」^{〔専カ〕}「ㄗ□」と墨書が確認できる。両端部が欠損し、上部に小孔を1箇所穿つ。

木16は、墨書ではないが、判読は難しいものの、片面に圧痕での文字が確認できる。形は上端部と下端部はともに丸みをおび、下端部にかけて細長くなる。

木17～21は棒状の加工品である。木17は下端部に向かって削り出されている。杭か。木18は一面を半円形に窪ませ、不等間隔に小孔を穿つ。木19は刻み目付きの棒で、両端部を欠く。16箇所の刻み目が施され、刻み目の間隔は0.4～0.6cmと不当間隔である。木20・21は先端部を丁寧削り出し、丸みをおびる。木20の先端部は炭化しており、火付棒か。

木22～27は箸である。両先端まで完存するものが、堀の上層から67点、中層から58点、下層から8点、合計133点と多量に出土している。上・中・下層から代表的な長さのものを図化した。調整は細く割った柾目材に面取りをした丁寧な作りである。

木28は指樽の栓である。立方体で各面の4隅に面取りがされ、各面中央部は黒漆、面取り部分には赤漆を施す。上面には黒漆地に赤漆で「中一」と書く。下面には円柱状の軸が欠損した痕跡があ

る。側面には円孔が穿たれ、細い金属管が埋め込まれているのが確認できる。

木29～33は栓である。上部は木29が断面方形、木30～33が断面円形。いずれも下部を削り出し、下端部を細くしている。木29には、下端から上に2.0cmの位置に使用時の圧痕がある。

木34～36は糸巻の梓木部分である。木34・35は内より腹面に径0.7cmの小孔が2箇所穿たれる。

木37はサルの人形である。頭部から腰にかけての部位で、下部に径0.2cmの孔があり、足部を失うが足は可動式だったとみられる。

木38・39は櫛である。木38は横櫛で、歯は多くを欠損している。挽き出し技法で作られており、歯の密度が高いことから用途は梳櫛と考えられる。背と歯の側面に黒漆を施す。木39は歯を全て欠損しているが、挽き出しの工具痕や歯の根元に毛引き線が確認できることから、横櫛の未製品と考えられる。

木40～43は人形頭部である。木40は目を表現する刻みがあり、頭頂部は丸い。木41は正面部分が炭化する。木42・43は削り出しにより鼻を表現する。立烏帽子形。

木44は棕櫚箒である。毛や中心を縛る縄が良好に残存していた。片端面を切り揃える。なお棕櫚帚の用途は掃除だけでなく、棕櫚は油分が多いことから筆筒や櫛など木製品の艶出しにも使用されていた。

木45～51は篋である。木45は撥状の形態で、刃先が幅広く、全体が薄く刃部分は尖らせる。先端部を少し欠損する。刃部には漆が付着していることから、漆を塗ったり、はみ出した時にすき取ったり、混ぜたりする際に使用する漆工道具の篋と考えられる。木46～48は片刃篋である。刃部分の先端は尖らせる。木46は角材の一方の小口面を残し、片刃に鋭く削り出す。下部には径0.5cmの孔が穿たれる。木49～51は片丸篋である。木49には2箇所に穿孔がある。木51の下部には孔があく。

木52～54・56は用途不明品である。木52は板状で、上部は丸く仕上げ、下端の平坦な部分中央から棒状の部分が延びる。棒状の下部は欠損する。題箋軸の頭部か。墨書の痕跡はない。木53の上部は四角く、下部は突き出す。ピック状である。墨書の痕跡はない。木54は板状で、上部は丸く仕上げ、下部は欠損する。丸篋か。木56は表面を細かく削り出して調整している。

木55は柄である。上部は欠損している。持ち手部分に赤漆を施す。

木57は刀身模造品である。切先から茎までの直刀を表現する。刃先は薄く、茎の先端を欠損する。

木58～60は刷毛である。平刷毛の柄部分で、毛は残存していない。刷毛の幅には約11cmの狭いものと15cm以上の広いものがある。木58・60は2列で紐を縛って毛を挟む。木59は木61のように紐で縛って毛を挟む孔がないことから、毛ではなく、板などを差し込む可能性も考えられる。

木61は幅広篋状工具である。薄板の上端を両側から部材で挟み、持ち手とする。何かをすき取る工具と考えられる。

木62は平筆の柄と考えられ、長い板状で先端部が広がる。先端部には毛など他の部品を差込み、楔を2箇所に打ち込み固定する。平筆か。

木63～66はミニチュア椀である。ともに横木取で無文である。木63は器高が低く、椀部分が浅い。高台内が浅く窪む。木64は平面形が楕円形。木66は器高がやや高く、椀部分に深さがある。高台内が浅く窪む。

木67・68は蓋または底である。木68・69の下面外周部が容器の口縁部に合わせて窪む。

木69～76は漆器である。漆器は、椀・蓋・折敷・器種不明など多くが出土したが、残存状態の良好な遺物を図化した。木69・70は蓋または底である。木69は両面に漆を施す。木70は片面に黒漆で模様を描く。木71は椀蓋である。外面に黒漆、内面には赤漆を施す。外面のつまみ内に赤漆で小振りの梅文を描く。木72～75は椀である。全て横木取であった。木72は平面形と高台部が楕円形を呈する椀である。内面は赤漆、外面は全体に黒漆を施し、赤漆で丸文を描く。木73は内面を赤漆、外面は全体に黒漆を施す。木74は内面を赤漆、外面は全体に黒漆を施し、金と赤漆で巴文を3方向に描く。木75は内面赤漆、外面は全体に黒漆を施し、赤漆で交差した植物文を描く。高台内に二重の山形の線刻がある。木76は皿である。底部が周縁部以外窪む碁笥底で、体部は斜め上方に短く立ち上がる。内外面に黒漆を施す。内面に赤漆で描いた細い線を確認できるが、漆が剥離しており全体の文様は不明である。

木77・78は球状木製品である。毬杖に用いられる毬の可能性はある。断面は円形で、上下に面があり、平滑にされる。大小2種類の大きさがある。木77は片面を欠損する。

木79は灯台の受皿部分である。2枚の板を十字に組み合わせ、中央の窪みに灯明皿を乗せて使用する。組み合わせた板のひと片方には、差し込み部分がある。高さを出すための棒や台などに差し込むものと考えられる。

木80・81は下駄である。下駄は、全部で5点出土したが、残存状態の良好な遺物を図化した。木80は台部と歯部を一木で作る連歯下駄である。台部の形は長円形で、歯は直立し、裾部で広がる。上面の踵のあたる部分に「日」と線刻される。全体に沈着した汚れが残る。木81は台部に歯部を差込む差歯下駄である。台に柄穴があり、歯が台表まで出ていることから露卯下駄と分類できる。台部の形は長円形で、指先部などがすり減る。

木82・83は下駄歯である。木82の歯は、木81と同様に2本の小口を台の柄穴に差し込む型である。下端部の木口面は使用によってやや丸く摩耗し、砂利が付着している。歯の付け根が外側にむかってやや反り上がっていることから、台の下側が丸みをおびる形状の下駄と考えられる。木83は1本の小口を差し込む型であると考えられ、2本のものと比べて不安定であるためか鉄釘で接続部分を補強している痕跡が確認できる。下端部の木口面は使用によって摩耗し、砂利が付着している。

木84～102は用途不明品である。木84は円形の板材に0.8cm程の孔があく。側面は丁寧に面取りしている。木85は薄い方形板に径0.7cmの円を毛引き線で書いたもので孔があく。木86は平面形が三角形で、栓のように下部を削り出す。下端部には穿孔がある。木87は平面形をコの字状に切り出す。表面は調整されていない。木88は中央に穿孔があり、上面には穿孔の周りに4つの刺し痕、側面2か所に1つの刺し痕がある。木89の平面形は八角形を呈し、断面は台形、中心には未貫通の孔

がある。木90の平面形は正方形を呈し、断面は中央部が緩やかに盛り上がる。中央に径0.1cmの穿孔がある。表面は滑らかに加工される。装飾部品の可能性がある。木91の平面形は十字形状を呈する。一端のみが長く尖る。木92の平面形は円環状を呈し、上下両面は平滑に加工される。木93の平面形は円形を呈し、中心には0.8cm程の孔があく。木94は両面に線刻で模様が刻まれる。木95は木筒のような形状であるが墨書は確認できなかった。厚さが0.8cmと厚く、残存状態は良好である。

木96は錘状木製品か。体部は円柱状を呈し、上部に鱗状の吊下げ部をもつ。吊下げ部には、径0.4cmの小孔がある。体部の表面には枝跡が残り、調整はされていない。木97・98は刀状木製品である。1個体と考えられ、木97は持ち手部分を表現し、木98は刃を表現してやや反りあがる。刃模造品か。木99～102は建築部材か。柄穴や差し込み部などがある。

(4) 銭貨・金属製品 (図版20、図14)

堀1から、銭貨・金属製品が出土した。

金1は、北宋銭の元豊通寶である。字体は篆書である。径2.4cm、厚さ0.05cm、重さ2.5g。2区上層から出土した。

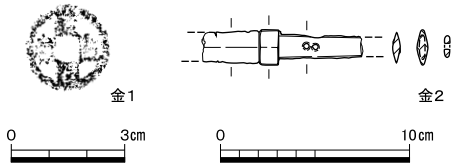


図14 銭貨拓影 (1 : 2)、
金属製品実測図 (1 : 4)

金2は、剣である。刃は両刃。茎には、目釘穴が2箇所^{はばき}に穿たれる。作り直しとみられる。釧^{はばき} (銅合金) が残る。刃の鐔に近い部分である。鎌倉時代とみられる。残存長8.6cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ15.0g。2区上層から出土した。

(5) 動植物遺存体

堀1から、骨・貝・種実などの動植物遺存体が出土した。

骨の内訳は、ウシ・ウマ・ネコの脛骨など、鳥類の複合仙骨、イシガメの背甲・腹甲、ヒトの頭蓋骨、ブリ属の椎骨である。堀の埋土には貝片や骨片が多量に含まれていたが、基本的小片であったために、採取及び同定は困難であった。

貝の内訳は、ドブガイとみられるイシガイ科の貝、イシガイ科のマツカサガイで、いずれも淡水に生息する。

種実の内訳は、モモやウメの核、マツ属複雑管束亜属の球果 (松ぼっくり)、オニグルミ、アンズ、メロン類、ヒシなどがある。また、この他植物遺体として、タケ亜科、モウソウチクが出土した。

骨・貝類の詳細な分析については付章1、珪藻などの自然科学分析については付章2で述べる。

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

5. ま と め

(1) 調査の概要

今回の調査では、1～3区では御土居の堀底部、3区では堀の西肩法面を検出した。堀は、地山の粗砂・砂礫層を掘って形成されており、部分的には堀西肩の砂礫層が崩れて流れ込んでいる状況も明らかになった。今回の調査地の北側の調査地(XF13-1・SM15)では、御土居の堀は幅13～14mであったことから、今回調査の3区南端付近では、調査区外東5～6mの新千本通中央付近の位置に堀の東肩が存在するとみられる。

堀1は、出土遺物から17世紀半ばに埋まり始め、18世紀前半には埋没したことがわかる。

(2) 御土居の堀

今回の調査では、1～3区で堀を検出した。近世の絵図や近代の地図、また周辺の調査成果から、この堀は御土居の堀と判断できる。以下では、堀の規模や畝状高まり・堀の埋没状況等の今回の調査成果とともに、周辺の調査成果と併せて調査地周辺の御土居の方位、堀内部の畝状高まりの形状と機能について検討する。

今回の調査地における堀の規模と畝状高まり(図版1)

1～3区すべての調査区で堀を検出した。北側の1区では、堀の中央部を検出しており、その検出規模は東西幅7.8m以上、最も深い場所で深さ1.5mであった。南側の2・3区では、堀の西半部を検出しており、その検出規模は幅7.8m以上、最も深い場所で深さ1.8mであった。なお、今回の調査で堀の東肩は検出していないが、これまでに行われた周辺の調査から、堀の幅は13～14mであったと復元できる。

1～3区で堀の内部に畝状高まりを確認した。1区北半では、南北方向の堀に直交する東西方向の単独とみられる畝状高まりを2本検出した。この高まりは上面幅0.2～0.4m、下面幅1.1～1.8m、高さ0.2mと小規模で、高まりと高まりとの間隔は6.7mである。

1区南半では東西方向と南北方向、2・3区では東西方向の畝状高まりを検出した。これらの畝状高まりの規模は上面幅0.1～0.2m、下面幅1.5～2.1m、高さ0.3～0.5mのものが多く¹⁾、東西方向の高まりと高まりとの間隔は3.0～4.2mである。1区南半では、想定される堀の幅のほぼ中央に南北方向の高まりが存在し、その西側に東西方向の高まりが3～4m間隔にみられ、土坑が南北に並んだような形状といえる。2・3区でも東西方向の高まりの形状が類似することから、想定される堀の中央(Y=-23,594～-23,593)付近に南北方向の高まりが存在すると考えられる。

堀の埋没状況

堀の断面観察や自然科学分析の結果に基づき、ここでは、堀が掘削されてから完全に埋没するまでの堀の環境を復元する。

今回の調査では、堀の埋土を上・中・下層の3層に分けたが、自然科学分析の結果から、埋土は

4層に大別できることが明らかとなった。調査では土質により2区東壁断面（図版6・7）の13・14層を下層としたが、自然科学分析（付章2）の結果から、13・14層は中層に分けることが妥当と考える。以下、堀の埋土は上層（3・4層）、中層（5～14層）、下層（15～17層）、最下層（29～38層）とする（図15）。

堀の最下層から上層まで、泥が堆積していることから、調査地周辺は築造当初から水が湛えられた水堀であり、その後も水が溜まるもしくは流れる環境であったことがわかる。

堀の埋土最下層は、畝状高まりと高まりの間に確認した粘土・細砂などである。29層は珪藻分析から、有機質を含まず、珪藻も著しく少ないことがわかった。33層は畝状高まりの崩落土である。最下層はごく短期間に溜まった泥や砂と崩落土で、築造当初の堆積とみられる。

埋土下層は、畝状高まりをわずかに超す高さまで溜まった泥である。珪藻分析から、付近は安定した水域であるが、水深は浅く汚濁した湿地のような状況が復元できる。御土居機能時の堆積とみられる。

埋土中層は、下層と比較して砂の混じった粘土層が厚く堆積する。珪藻分析では、中層が堆積した時期には水深が深くなり、水が流れる環境となった。流水していたため水質も綺麗だったようで、中層が堆積する時期、堀の水域環境が大きく変化したといえる。また粘土層と粘土層の間に、厚さ10cmほどの砂層の波状堆積（図版7－8層）を調査区全体で確認した。洪水により砂が流れ込んだとみられる。江戸時代の『京都惣曲輪御土居絵図』（元禄15年（1702）作成）（図16）によると、御土居の土塁を切り通し、道や洛中から堀へと続く排水路が作られている。図16の御土居絵図では、調査地周辺の現五条通から七条通にかけて土塁を切り通して作られた道が5本確認でき、その道に沿って排水路も設けられた様子が描かれている。このように絵図からも江戸時代の堀には、洛中を流れる河川や排水が流れ込んでいたことが確認でき、しばしば洪水砂も運んできたと考えられる。この頃には本来の御土居の堀としての機能を終え、江戸時代の水路としての機能した堆積とみられる。

埋土上層には有機物を多量に含む粘土が堆積していた。中層が徐々に埋没し水位が低くじめじめした湿地（上層）となり完全に埋没したとみられる。堀は江戸時代の水路としての機能も終え、

2区東壁断面(図版6・7)	調査での区分	自然科学分析での区分
3 10YR3/1 黒褐色粘土	堀1上層	堀1上層(3・4層)
4 10YR2/1 黒色腐植土 木製品多量混		
5 10YR3/1 黒褐色粘土 小骨片・木製品混	堀1中層	堀1中層(5～14層)
6 10YR3/1 黒褐色粘土 2.5Y4/1 黄灰色細砂混		
7 5Y4/1 灰色細砂 粘土塊混		
9 2.5Y3/1 黒褐色砂混粘土		
13 5Y3/1 オリーブ黒色粘土	堀1下層	堀1下層(15～17層)
14 5Y2/2 オリーブ黒色粘土		
15 2.5Y3/1 黒褐色粘土		
16 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 φ0.2cm砂粒少量混		
17 5Y3/1 オリーブ黒色粘土		
29 5Y4/1 灰色粘土		
32 10YR4/2 灰黄褐色粘土		
33 2.5YR5/6 明赤褐色砂礫 5Y4/1 灰色粘土混	堀1最下層	堀1最下層(29～38層)
38 2.5Y4/1 黄灰色細砂		

図15 堀埋土の層序区分対応図

廃絶したようである。

御土居の方位（図17・18、表4）

今回の調査では、上述の通り、1～3区すべての調査区で堀を検出した。1～3区は南北に直線状に並ぶが、北側の1・2区では堀の内部を、南側の3区では堀の西肩法面を確認している。すなわち、今回の調査地では堀が北で西にやや振れていると想定できる。

今回の調査地周辺では、調査3・7・11・12・21・23・24で堀を確認しており、各調査区の堀の位置を図17に示した。京都市の遺跡地図では、御土居の方位は五条通以北では北で西にやや振れた南北方向で、五条通以南ではほぼ正方位としているが、調査成果により、五条通の調査11から七条通の北で御土居がクランクする箇所の調査3まで、堀が北で西に3～4度振れていたことがわかった。

御土居における障子堀の形状と機能（図18・19、表4）

今回の調査で検出した御土居の堀の内部には、東西・南北方向の畝状高まりを検出した。調査地周辺では、これまでも御土居の堀とその内部に畝状高まりを確認している。現在のところ、五条通以南の調査11・23・24から今回の調査地にかけて、さらに御土居が屈曲した調査³⁾でも検出している。調査11から調査3にかけて堀内部に畝状高まりが存在したと想定した場合、総延長は750mに及ぶ。

これらの調査で検出した畝状高まりの形状は、①東西方向と南北方向の2方向の畝状高まりが存在するもの（今回の調査1区南半～3区、調査3、調査23・24）、②堀に直交する東西方向の畝状高まりが単独で存在するもの（今回の調査1区北端、調査11）と、大きく2タイプに分けることができる。

さらに①には、東西方向・南北方向の畝状高まりともにそれぞれの間隔に規則性がないもの（調査23・24）、南北方向の畝状高まりを中心に隅丸方形の土坑が連続するような形態をもつもの（今回の調査、調査3）がある。また②にも畝状高まりの高さが40～60cmの高いもの（調査11）、10～20cmほどの低いもの（今回の調査1区北端）がある。このように、調査地周辺の畝状高まりはその規模や間隔などが異なる様々なタイプが存在する。

調査24の報告書でも触れたが、堀内にみられた畝状高まりは、城郭の堀の形態の一つである障子堀（堀障子）とすることができる。

障子堀は発掘調査により全国の城郭で様々な形態が確認されている。井上哲郎氏は堀の方向と平行に畝を設けるA類、堀に単独或いは一列に連続する畝を設けるB類（B-I類～B-III-2類の4分類）、堀に二列以上連続し平面的に広がるものC類（C-I類～C-III類の3分類）の3型式計8類⁴⁾の分類案を提示している。

これらに基づくと、御土居の堀で検出した畝状高まり①・②いずれのタイプも障子堀とすることができる。ただし、タイプ②の非常に低い畝状高まり（今回の調査1区北端）については、故意に掘り残したのか、障子堀としての機能を果たすのか等は不明であり、作業単位であった可能性も考えられる。

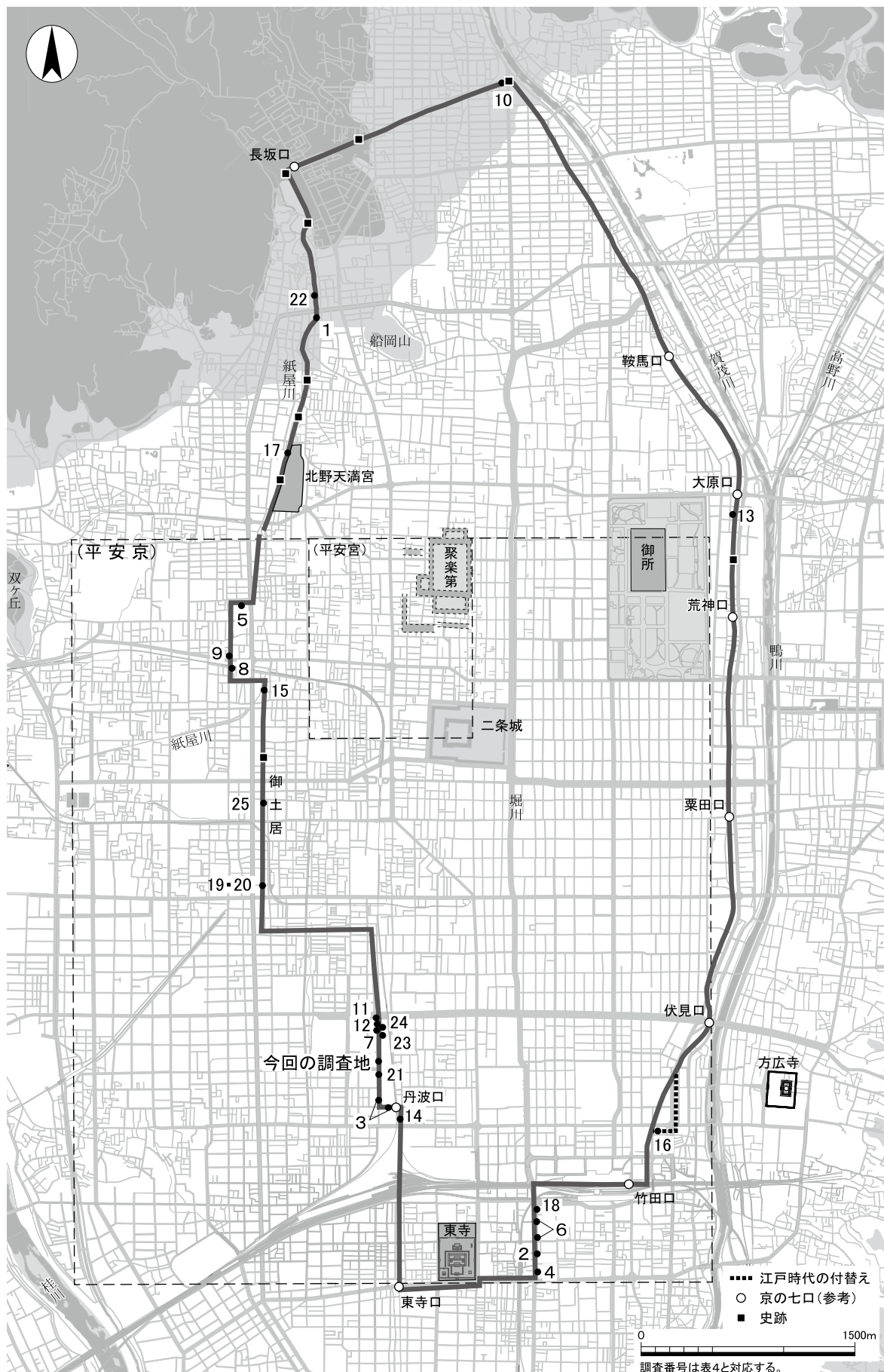


図18 御土居主要調査地点位置図 (1 : 40,000)

表4 御土居主要調査一覧表

地点 番号	調査地	調査年度	調査概要	出土遺物	文献 番号
1	北区衣笠荒見町 (旧野口町)	1918年	土塁を測量。		1
2	南区西九条春日町13	1980年度	堀を検出。 幅17.5m、深さ2m。	文楽人形など多量の木製品と共に6体分の 人骨が出土。	2
3	下京区朱雀堂ノ口町	1981～ 1982年度	土塁と堀を検出。 土塁は幅20m、高さ2m。 堀は幅20m、深さ2m。		3
4	南区西九条春日町19	1984年度	堀を検出。 幅20m、深さ1.5m。	「天正十三年」(1585)、「甲午承應」(1654)、 「寛文九年」(1669)、「延々寶三年」(1675) 紀年銘、キリシタン関係などの木簡が出土。	4
5	中京区西ノ京中保町 1-4 (北野中学校)	1987年度	堀を検出。 堀の南側幅5m以上、深さ1m。		5
6	南区西九条鳥居口町 1	1991年度	堀を検出。 堀の東側幅14m以上、深さ2.5m。	「正保四年」(1647) 紀年銘など多数の木簡 が出土。	6
7	下京区中堂寺南町 地内	1997年度	堀を検出。 堀の西側幅3m。		7
8	中京区西ノ京円町 地内	1997年度	土塁内溝を検出。 幅1.7m、深さ0.3m。		8
9	中京区西ノ京円町 55-1	1999年度	土塁基底部と内溝を検出。 基底部は幅13～14m。 内溝は幅2.0m、深さ0.4m。		9
10	北区紫竹上堀川町 1、1-15	1999年度	土塁基底部の北端を検出。		10
11	下京区中堂寺南町 地内	1999～ 2000年度	堀を検出。 幅12.5m、深さ1.5m。	17世紀後半の陶磁器、寛永通寶20数枚が 出土。	7
12	下京区中堂寺南町 地内	2001～ 2002年度	堀を検出。 堀の西側幅1.6m。		7
13	上京区御車道今出川 下る二丁目栄町361	2007年度	土塁内溝を検出。 幅1.6m以上、深さ0.6m。		11
14	下京区朱雀正会町 1-20	2008～ 2009年度	土塁基底部の一部を検出。		12
15	中京区西ノ京笠殿町 38	2012年度	土塁基底部・犬走・堀を検出。 堀の東側幅14m以上、深さ2m。		13
16	下京区小稲荷町 22-2ほか	2013年度	17世紀前半に付け替えられた土塁基底 部と土塁外側の排水路を検出。 基底部は幅4m以上。		14
17	上京区馬喰町 (北野天満宮境内)	2013年度	土塁と石組暗渠を検出。 土塁は幅約17m。暗渠は長さ19.3m。		15
18	南区西九条北ノ内町 6・7・8-1	2014年度	堀を検出。 堀の東側幅8.5m以上、深さ0.75m。	17世紀前半～19世紀の陶磁器類、木製品 が出土。	16
19	中京区壬生淵田町 7・8	2013・ 2014年度	土塁基底部を検出。 幅20m以上、高さ1m。		17
20	中京区壬生淵田町 7・8	2014～ 2015年度	堀を検出。 堀の西側幅6m以上、深さ1.7m以上。		18
21	下京区朱雀分木町 80番地	2016～ 2017年度	堀を検出。 堀の西側幅1.2～3.2m、深さ0.6m。		19
22	北区紫野北花ノ坊町 31ほか	2016年度	土塁、犬走、堀を検出。 土塁の西側幅16m、高さ約3.6m。 犬走は幅1.9～2.5m。 堀の東側幅8.6m、深さ5.7m。		20
23	下京区中堂寺南町 130番地1	2020年度	堀を検出。 堀の東側幅10m、深さ1.5m。	慶長丁銀の極印鑽が出土。	21
24	下京区中堂寺南町 130番地1ほか	2021年度	土塁基底部、犬走、堀を検出。 犬走は幅1.3m。 堀の東側幅8.5m、深さ1.6m。		22
25	中京区西ノ京新建町 12-38	2023年度	土塁、犬走、堀を検出。 土塁の西側幅15m、高さ1.2m。 堀の東側幅9.5m、深さ2.7m。		23
26	下京区朱雀分木町 19-2	2023年度	今回の調査。堀を検出。 幅7.8m以上、深さ1.8m。		本 報 告

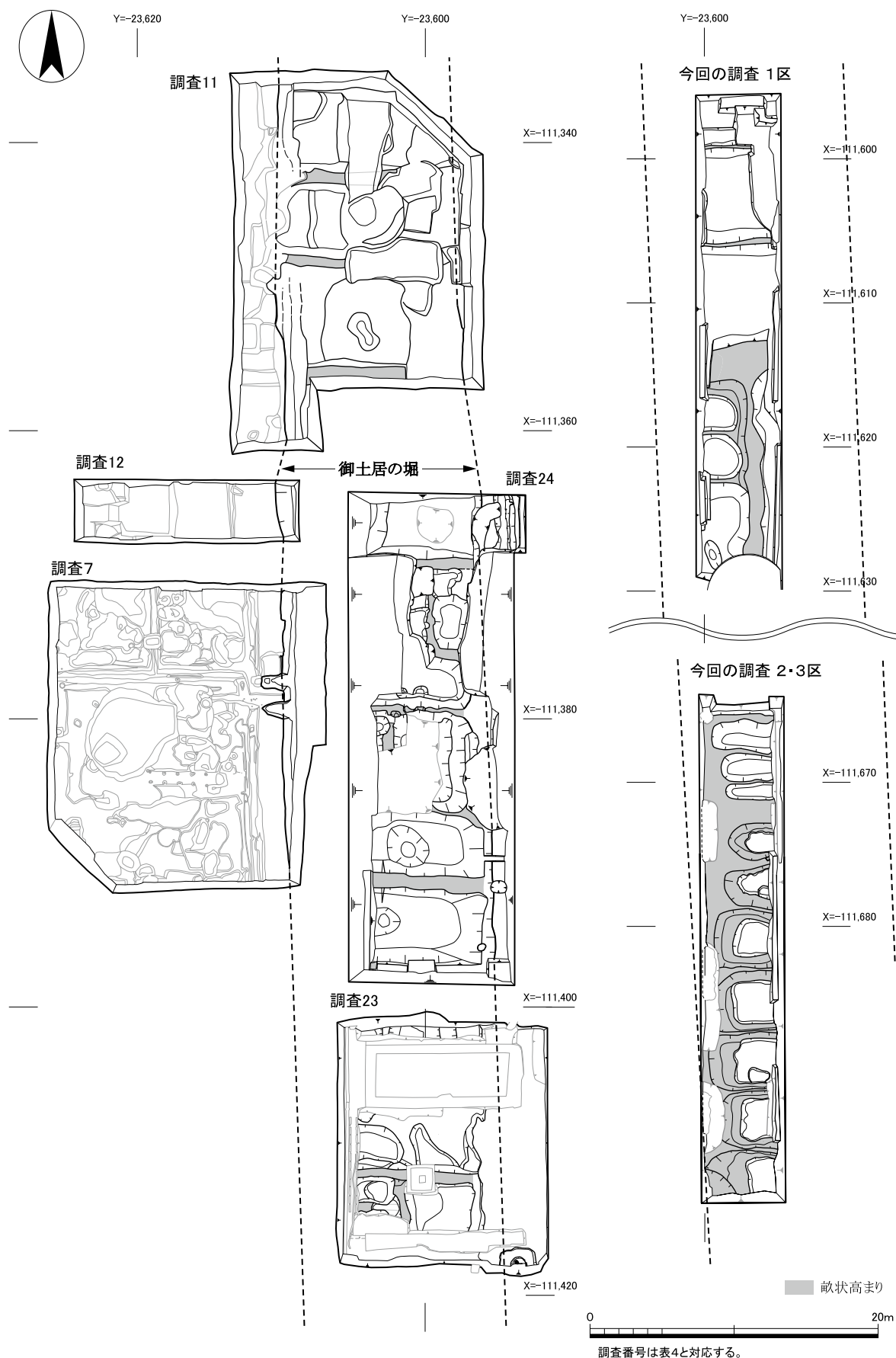


図19 調査地周辺における堀の畝状高まり（1：400）

なお、御土居には畝状高まりのない堀も確認していることから（調査1・6北側・15・18）、場所により堀の構造が異なっていたことが指摘できる。

障子堀は、近世の軍学書である有澤武貞『兵法拔書 夫之抄私解』（1707年）や津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（1713年）などによると、堀底に縦横や横に障壁を置く、畝を立てるものとされる。障壁（畝）の規模については、『武教全書諸説詳論家伝秘抄』で「広さ或いは一尺、二尺ばかりにも、乃至それよりも細くとも」と、縦横に畝をおくと記されており、詳細な規定はなかったようである。

障子堀の機能は、畝による堀底の移動制限や畝により滞水した堀底に深泥が溜まることによる防御機能、堀掘削時の湧水の調整機能、標高差のある地形に掘られた堀の底に滞水させるための保水機能などが先述の軍学書に記される。

調査地周辺の御土居の堀は水堀であり、畝状高まりと畝状高まりとの間には泥が溜まっていたことから、防御機能としての効果が窺える。また、中世城郭研究会のシンポジウム『「障子堀」の新展開』の中で、広瀬季一郎氏や井上哲朗氏は堀掘削時に土を運搬するための作業用通路としての機能や、畝を掘り残すことで、堀の掘削土量が減るという利点も挙げている⁵⁾。調査24の報告書でも記したように、今回の調査の畝状高まりにも、堀掘削時の作業用の通路や湧水対策のための機能もあったとみられる。

丹波口

では、なぜこの付近の堀には畝状高まり、いわゆる障子堀を取り入れたのか、最後に少し検討したい。

今回の調査地の南東約300mには、京七口の一つである丹波口（図18）が存在する。丹波口は、丹波から山陰へ向かう山陰道（現七条通とほぼ同位置）に通じる京の出入口であり、御土居築造当初から存在したとみられる⁶⁾。

御土居に設けられた丹波口は七条千本を北に上がった位置（図16 ㊸）にあり、丹波口付近の御土居はクランク状に折れ曲がっていたことが御土居絵図からもわかる。なお、御土居絵図では、現七条通の位置に切り通された口（図16 ㊹）も存在するが、正保元年（1644）に幕府から命じられ、作成された「正保山城国絵図」では図16 ㊸の位置にのみ口が開いているため、図16 ㊹は正保年間から元禄15年の間に切り通されたものとみられる。

この「正保山城国絵図」によると、当時の山陰道もクランク状に折れ曲がっていた⁷⁾。このように丹波口は、御土居と山陰道がいずれも屈曲する複雑な構造であったことが指摘できる。直線状に人が往来できない構造は、一度に多くの人が京内に入って来られないように工夫した結果とみられる。このような往来の多い場所であったため、堀の内部に防御機能をもつ畝状高まり（障子堀）を採用し、丹波口の防御性を高める意味があったと推測できる。

註

- 1) 2・3区では東西方向の畝状高まりを10本確認している。畝状高まりの高さは0.2mの低いものが2本、0.7～0.8mの高いものが3本であるが、0.3～0.5mのものが5本と多い。
- 2) 5本の道のうち東西方向の御土居に通された道(図16 ④)は、御土居築造時から開いていた丹波口である。
- 3) 調査3の畝状高まりについて、丸川氏は「第6回平安京・京都研究集会」での発表の際に障子堀と指摘があったものの、城郭の障子堀と規模や形状が異なることから、堀を掘削する作業工程の中で生じた高まりであるとした(丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究420』1997年)。今回の一連の調査成果から、畝状高まりが連続する状況や修復された痕跡(今回の調査)、畝状高まり高まりの上面を平坦にして礫を敷いた状況(調査23・24)などを確認しており、作業工程の中で自然と発生したのではなく、故意に畝状高まりを形成したことが明らかとなったため、調査3の畝状高まりも障子堀と考える。
- 4) 井上哲郎「第2章 検出遺構について 第1節 障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター 研究紀要20』財団法人千葉県文化財センター 1999年
- 5) 八巻孝夫編『中世城郭研究 第30号』中世城郭研究会 2016年
- 6) 福島克彦「第三章「惣構」の展開と御土居」『都市』前近代都市論の射程 仁木宏編 2002年
- 7) 福島克彦氏にご教示いただいた。

文献一覧(表4 御土居主要調査一覧表)

- 1 西田直二郎・梅原末治「御土居」『京都府史蹟勝地調査会報告 第2冊』京都府 1920年
- 2 「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 3 平田 泰ほか「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4 丸川義広ほか「平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 5 菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6 菅田 薫「平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 8 小檜山一良ほか「平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 9 小森俊寛ほか「平安京右京一条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 10 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 11 馬瀬智光「御土居跡・寺町旧域 No.21」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年

- 12 小檜山一良『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－1
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 13 高橋 潔ほか『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012－25 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 14 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013－11
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 15 南 孝雄「埋蔵文化財調査」『北野天満宮御土居 史跡等・登録記念物・歴史の道整備事業報告書』宗
教法人北野天満宮 2014年
- 16 松吉祐希ほか『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014
－9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 17 鈴木久史「平安京右京四条二坊十一町跡・壬生遺跡・御土居跡（13H408）」『京都市内遺跡詳細分布調
査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 18 布川豊治ほか『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 19 柏田有香ほか『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡・御土居跡、堂ノ口遺跡』京都市埋蔵文化財研
究所発掘調査報告2017－13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 20 持田 透ほか『御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－11 公益財団法人京都市埋蔵
文化財研究所 2017年
- 21 柏田有香『平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020－8 公
益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年
- 22 松吉祐希『平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報
告2021－15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年
- 23 小檜山一良『平安京右京三条二坊十二町跡・御土居跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査
報告2023－4 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2024年

付章1 御土居の堀跡出土の動物遺存体と大型植物遺体

関 晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

丸山真史（東海大学人文学部）

ここでは、主に堀1（御土居の堀跡）から出土した動物遺存体と大型植物遺体について報告する。堀1の堆積層における推定年代は下層が17世紀中頃、上層が17世紀末～18世紀であり、江戸時代前期から中期に相当する資料群である。報告する遺存体については、いずれも発掘調査時に取り上げられたものであり、篩選別等による均一的な遺存体組成ではない。

動物遺存体（表1、図1・2）

堀1（御土居の堀跡）から出土した動物遺存体は24点であり、貝類、魚類、鳥類、哺乳類、爬虫類を確認した。

貝類は2・3区の中層から下層にかけて、淡水に生息するイシガイ科の二枚貝が5点出土した。いずれも遺存状態が悪く、破片や殻皮の状態である。うち1点は殻頂周辺にみられる顕著な顆粒からマツカサガイとし、2点は大型で1点をドブガイ類、もう1点をドブガイ類の可能性が高いものとした。過去の御土居の堀の調査においてもイシガイ科の淡水に生息する二枚貝は出土しており、堀に生息していたものと考えられる。

魚類は2区の中層から出土した1点があり、ブリ属の椎骨である（図2-No.1）。

鳥類は2区の下層から出土した1点があり、カモ亜科の複合仙骨でカルガモより大型である（図2-No.2）。

哺乳類はネコ4点、ヒト4点、ウシ7点、ウシ／ウマ1点が出土した。

ネコは3区中層からまとめて頭蓋骨（図2-No.3）、左肩甲骨（図2-No.4）、左上腕骨（図2-No.5）、右脛骨（図2-No.6）が出土した。No.3の頭蓋骨には、右後頭骨と右頭頂骨を横断して前後方向の亀裂が走り、骨折痕と推測される。線上に陥没しているが、骨増殖がみられ、治癒したものと考えられる。このことから、骨折の際に死亡したものではないと判断できる。これらネコの骨については同一個体に属するものと考えられる。

ヒトは1区上層から出土した頭頂骨と左右不明脛骨？。2区上層から出土した右頭頂骨2片（図2-No.7-1・2）。3区中層から出土した後頭骨（図2-No.8）がある。1区上層から出土した脛骨？は両端部を欠く。表面には不整形な凹凸が見られ、骨梅毒症状の可能性がある。また、数条の鈍く浅い搔き傷があり、遺構埋没以前に犬などによって噛まれた可能性がある（図1）。No.



図1 ヒト脛骨？骨幹部
（梅毒病変？と噛痕）

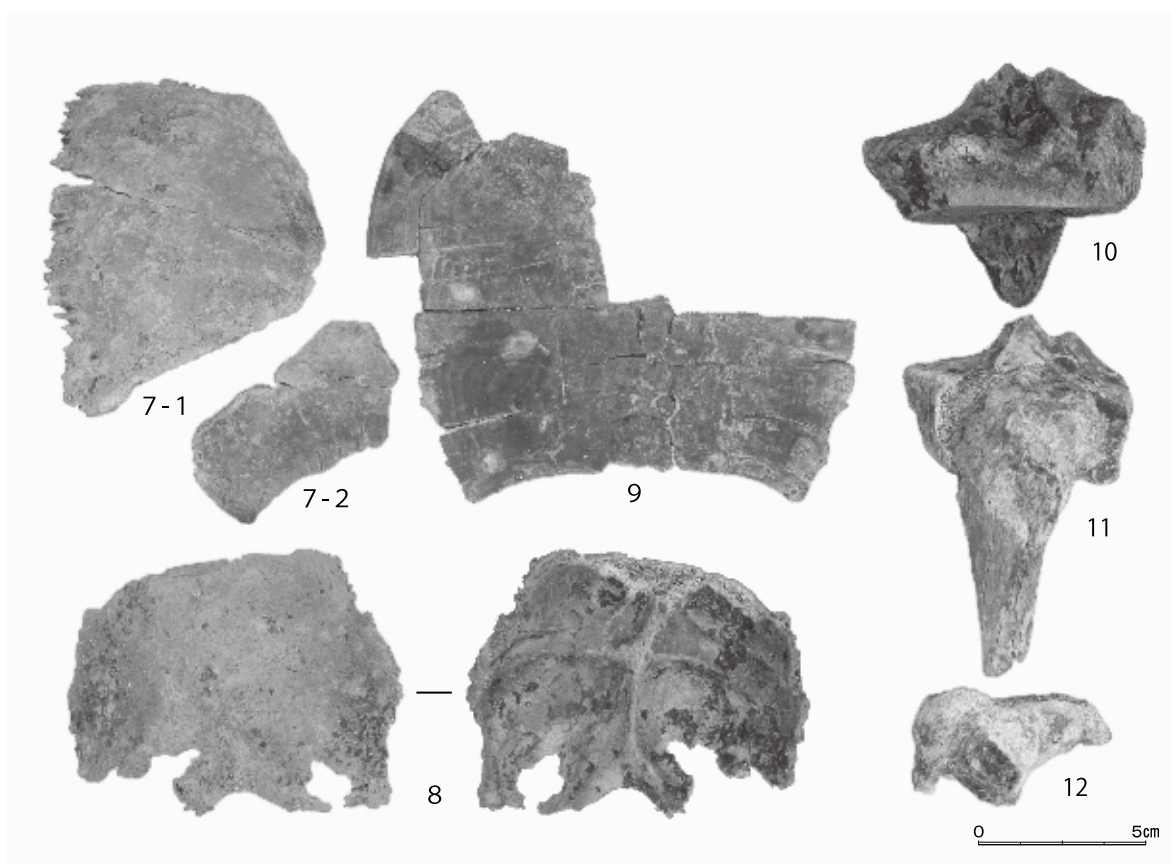
表1 堀1出土の動物遺存体一覧表

地区 遺構 層位	大分類	小分類	部位	写真No.	備考
2区 堀1 下層	斧足綱	イシガイ科	殻皮、殻質(左右不明)		破片、大型のドブガイ類
2区 堀1 下層	斧足綱	イシガイ科	殻皮、殻質(左右不明)		破片
2区 堀1 中層	斧足綱	イシガイ科	殻皮、殻質(左右不明)		破片、大型のドブガイ類か
2区 堀1 下層	斧足綱	イシガイ科マツカサガイ	殻皮、殻質(左右不明)		破片
3区 堀1 中層	斧足綱	イシガイ科	殻皮(左右不明)		ほぼ殻皮のみ
2区 堀1 上層	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	1	
2区 堀1 下層	鳥綱	カモ亜科	複合仙骨	2	カルガモより大型
3区 堀1 中層	哺乳綱	ネコ	頭蓋骨、肩甲骨(左)、 上腕骨(左)、脛骨(右)	3～6	同一個体 頭蓋骨に骨折と治癒痕跡
1区 堀1 上層	哺乳綱	ヒト	頭蓋骨頭頂骨(左右)		残存不良
1区 堀1 上層	哺乳綱	ヒト	脛骨?骨幹部(左右不明)	挿図1	骨表面に凹凸あり、骨梅毒症状か 鈍い線条痕は動物(犬?)の噛痕か
2区 堀1 上層	哺乳綱	ヒト	頭蓋骨頭頂骨(右)	7-1・2	冠状縫合～頭頂孔1片と鱗縁部1片 同一個体
3区 堀1 中層	哺乳綱	ヒト	頭蓋骨後頭骨	8	上部と下部の一部を欠く 大後頭孔の背側縁が一部残る 外後頭隆起は滑らか
1区 堀1 下層	哺乳綱	ウシ	脛骨近位端(右)	10	後位側から前位方向に鋸で切り、 途中で折り取る
1区 堀1 下層	哺乳綱	ウシ	脛骨近位端(左)	11	後位側から前位方向に鋸で切り、 途中で折り取る
1区 堀1 下層	哺乳綱	ウシ	脛骨遠位端(左)	12	切断
1区 堀1 下層	哺乳綱	ウシ	脛骨近位端破片(左)4点		
1区 堀1 下層	哺乳綱	ウシ/ウマ	脛骨近位端(左)		
2区 堀1 中層	爬虫綱	イシガメ	背甲(約1/3)、腹甲(約1/6)	9	同一個体、自然埋没

7-1は前頭部との冠状縫合と左側頭骨との矢条縫合箇所が残り、右頭頂骨孔が確認できる。No.7-2は右側頭骨と接する鱗縁部が残る。両片は接合しないものの、骨厚や骨質から同一個体に属するものと考えられる。No.8は上部と下部の一部を欠くが、左右頭頂骨と関節するラムダ縫合が残り、下部では大後頭孔の背側縁が残る。外後頭隆起は成人男性にみられる顕著な発達は確認できない。

ウシは1区下層からまとめて右脛骨近位端(図2-No.10)、左脛骨近位端(図2-No.11)、左脛骨遠位端(図2-No.12)、左脛骨近位端の破片4点を確認した。そのほかウシ/ウマの脛骨遠位端(左)がある。このうち図示したNo.10～12は、骨幹部から人為的に外されたものである。No.10・11は後位から前位に向けて鋸を挽いて2/3程度の切込みを入れ、残りを割り取っている。No.12は痕跡が明瞭ではないが直線的に切断される。その他の近位端破片4点とウシ/ウマ左脛骨は遺存状態が悪いため加工痕等は確認できないが、骨幹部の出土が無いことから、これらも切断されたものの可能性がある。

爬虫類は、2区中層でイシガメの甲羅を確認した(図2-No.9)。背甲の約1/3、腹甲の約1/6が遺存する。背甲と腹甲がともに残ることから、人為的な廃棄物ではなく、堀に生息していたものと考えられる。



1. ブリ属 2. カモ亜科 3～6. ネコ 7・8. ヒト 9. イシガメ 10～12. ウシ

図2 堀1（御土居堀）出土の動物遺存体

表2 堀1出土の大型植物遺体一覧表

地区 遺構 層位	調査区別同定結果(点数)	層位別同定結果(点数)
1区 耕作土	オニグルミ堅果(1)、モモ核(1)	オニグルミ堅果(2) モモ核(1) タケ亜科(破片)
3区 耕作土	オニグルミ堅果(1)、タケ亜科(破片)	
1区 堀1 上層	オニグルミ堅果(8)、ウメ／アンズ核破片(1)、モモ核(3)、マクワシロウリ型メロン類種子(1)、二葉松類球果(4)、モウソウチク? (1)、タケ亜科(破片多数)	オニグルミ堅果(9) クリ堅果(1) アンズ核(1) ウメ核(1) ウメ／アンズ核破片(1) モモ核(5) ゴキヅル種子(8) トウガン種子(1) マクワ・シロウリ型メロン類種子(12) モモルディカメロン型種子(13) 二葉松球果(7) モウソウチク? (1) タケ亜科(破片多数)
2区 堀1 上層	クリ堅果(1)、ウメ核(1)、モモ核(2)、マクワ・シロウリ型メロン類(10)、モモルディカメロン型メロン類種子(13)、ゴキヅル種子(8)、トウガン種子(1)、二葉松類球果(1)、タケ亜科(破片多数)	
3区 堀1 上層	オニグルミ堅果(1)、アンズ核(1)、マクワ・シロウリ型メロン類種子(1)、二葉松類球果(2)、タケ亜科(破片多数)	
1区 堀1 中層	モモ核(2)、タケ亜科(破片多数)	オニグルミ堅果(7) クリ堅果(1) モモ核(4) ゴキヅル種子(1) 二葉松類球果(3) タケ亜科(破片多数)
2区 堀1 中層	オニグルミ堅果(4)、モモ核(2)、ゴキヅル種子(1)、二葉松類球果(2)、タケ亜科(破片多数)	
3区 堀1 中層	オニグルミ堅果(3)、クリ堅果(1)、二葉松類球果(1)、タケ亜科(破片多数)	
1区 堀1 下層	モモ核(1)、タケ亜科(破片多数)	モモ核(1) オニビシ果実(10) タケ亜科(破片多数)
2区 堀1 下層	オニビシ(10)、タケ亜科(破片多数)	
3区 堀1 下層	タケ亜科(破片多数)	

大型植物遺体 (表2)

大型植物遺体は下記の通りである。

堀1埋没後の耕作土からは、オニグルミ堅果2点、モモ核1点が出土した。堀1上層からはオニグルミ堅果9点、クリ堅果1点、アンズ核1点、ウメ核1点、ウメ／アンズ核破片1点、モモ核5点、ゴキヅル種子8点、トウガン種子1点、マクワ・シロウリ型メロン類種子12点、モモルディカメロン型メロン類種子13点、そのほか二葉松類の球果7点が出土した。中層からは、オニグルミ堅果7点、クリ堅果1点、モモ核4点、ゴキヅル種子1点、そのほか二葉松類の球果3点が出土した。下層からは、モモ核1点、オニビシ果実10点が出土した。タケ亜科については全調査区の各層から多く出土している。いずれも加工痕を残すものは確認できず、個体数も判別が困難なため不明である。1区上層からモウソウチクの可能性のあるものが1点出土している。

考察

上述した動物遺存体は、本調査地から北300m地点で行った平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡の発掘調査において17世紀代に埋没する堀13（御土居の堀）から出土した動物遺存体とよく似ており、そこでは貝類のセタシジミ、イシガイ科二枚貝、魚類のブリ属、哺乳類のネコ、イヌ、ヒト、ウシを確認している。特にウシは右脛骨近位端にNo.10～12と同様の加工痕が残るものが3点出土している。出土した層位に違いはあるものの、17世紀代にウシの脛骨の骨幹部を用いた骨製品

製作が付近で行われていたことは間違いないであろう。また、ウシのその他の部位が出土していないことから、四肢骨または脛骨が材料として搬入されていた可能性がある。一方で調査地から南50m地点の平安京右京七条一坊二町跡・御土居跡の発掘調査においては、濠298（御土居の堀）の江戸時代中期以降と推定される上層からウシ右寛骨やウシ／ウマ椎骨が出土しており²⁾、中期に入ると少し様相が異なる。

大型植物遺体については、下層で出土量が少なく、中層から上層にかけて出土量が植物種と共に増加する。この傾向は漆器椀や箸といった食膳具の出土傾向とも一致しており、堀への廃棄か、堀に注ぐ水路からの流入かは不明であるが、食用となる植物遺体については生活廃棄物が多く含まれている可能性が高い。一方、マツ属複雑管束亜属と呼ばれる二葉松類の球果や大量に出土したタケ亜科とした竹筴類は、過去の調査においても御土居の堀跡から多く出土しており、『上下京町々古書明細記』などに書かれる、御土居土塁に植えられた木や竹にあたる可能性がある。

終わりに、ここまで動物遺存体や大型植物遺体から近年の調査成果を踏まえて考察を行ったが、この地点から南東に約1.5km離れた京都市南区西九条周辺の御土居の堀跡からも、動物遺存体は多数出土しており、木製品にも工具や人形などといった共通点がみられることから、御土居の全体的な関連性についても、今後検討していきたい。

註

- 1) 丸山真史「付章1 堀13（御土居跡）から出土した動物遺存体」『平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年
- 2) 柏田有香・後川恵太郎・金島恵一『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年 pp17-18

参考文献

- 丸川義広・木下保明・辻 裕司「9. 平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 菅田 薫「9. 平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 松吉祐希・木下保明『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 内田好昭・関広尚代『京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 御土居跡（西九条周辺）出土品』京都市文化市民局 2019年
- 松吉祐希・布川豊治『平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

付章2 御土居の堀跡堆積物の珪藻分析

株式会社パレオ・ラボ

(1) はじめに

京都府京都市下京区の中央卸売市場の敷地において、「御土居」の堀跡が見出された。この堀跡の堆積物の珪藻分析を行い、堆積環境の検討を行う。

(2) 試料と処理方法

試料は、2区東壁断面より不攪乱柱状試料として採取した。図1に調査地点の位置、発掘調査時に記載された2区東壁の断面図と堆積物の層相、採取した不攪乱柱状試料の写真、試料採取地点の堆積状況を記載した柱状図と試料採取層準を示す。分析試料は、不攪乱柱状試料から採取した試料番号1～13の13点の泥質堆積物である(表1)。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1) 乾燥させ、秤量した試料をビーカーに移し、30%過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。(3) 遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

各試料のプレパラートに対し、珪藻殻300個以上、少なくとも100個以上を目安に同定・計数を行った。ただし、珪藻殻の含有量の少ない試料については100殻以下で計数を終えた。また、希釈率と検鏡面積から、試料の乾燥重量1gあたりの珪藻殻数(破片含む)を求めた。

(3) 結果

検出した珪藻は31属57種68分類群に同定された。計数結果を表2に、珪藻ダイアグラムを図2に示した。珪藻ダイアグラムにおけるプラス(+)は3%以下の産出を、アスタリスク(*)は検出数100個以下での産出を示す。また、検出した珪藻のうち、結果・考察において重要な種の写真を図3に付す。次に、各試料における産出珪藻の特徴について、下位から順に述べる。種の特徴の説明にあたっては、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群(表3)と、渡辺ほか(2005)に記載された種ごとの有機汚濁への耐性とpHへの適応能を用いた。千葉・澤井(2014)の環境指標種群に登場しない生息環境未分類の種については、海水から淡水までの水域ごとに不明・不定種(U1～U5)を設けて分け、淡水域に生育し、複数の環境をまたぐ生態をもつ場合には広布種(W)に分類した。渡辺ほか(2005)に記載のない種は未詳なため、水質は可能性・傾向として理解されたい。

3層(試料1)と29層(試料13)以外の11試料で300個以上の珪藻殻を検出した。29層(試料13)は珪藻の含有量が少なく、従来は計数しない破片も計上した。同定できた12個の珪藻殻は、陸

生A群（Qa）で好汚濁性、好アルカリ性の*Luticola mutica*や陸生B群（Qb）で好汚濁性、好アルカリ性の*Diadmesmis confervacea*が検出された。

17層下部（試料12）では344個の珪藻殻を検出し、乾燥重量1gあたりの珪藻殻数は 1×10^7 個と推定される。中～下流性河川（K）で好清水性、中性の*Planothidium lanceolatum*と広布種（W）で好清水性、中性の*Navicula oppugnata*が多く検出された。有機汚濁に対しては好清水性種が多く、pHに対しては中性種が多く見られた。

17層上部（試料11）では338個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 8×10^7 個と推定される。中～下流性河川（K）で広適応性、好アルカリ性の*Melosira varians*と最下流性河川（L）で好汚濁性、好アルカリ性の*Cyclotella meneghiniana*、広布種（W）で広適応性、真アルカリ性の*Nitzschia acicularioides*の3種の産出率がそれぞれ10%を超えている。17層下部（試料12）から変化して、有機汚濁に対しては広適応性種が多く、pHに対しては好アルカリ性種が多く見られた。

16層（試料10）と15層（試料9）は似た産出傾向であった。16層（試料10）では343個、試料9では338個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数はともに、 1×10^8 個と推定される。淡水不定・不明種（U5）で好汚濁性、好アルカリ性の*Staurosira construens* var.*venter*が約60%を占めた。有機汚濁とpHについては、60%を占める*Staurosira construens* var.*venter*に寄り、好汚濁性、好アルカリ性の種が多い。

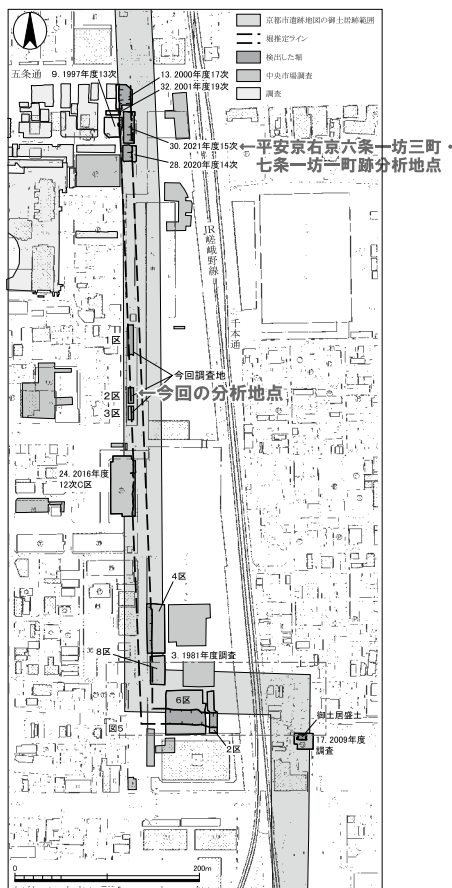
14層（試料8）から6層下部（試料6）は比較的似た産出傾向を持つ。14層（試料8）から6層下部（試料6）で検出した珪藻殻の数は順に370個、351個、342個であり、珪藻殻数は 1×10^7 個、 7×10^7 個、 7×10^7 個と推定される。*Staurosira construens* var.*venter*の産出が減り、*Melosira varians*や広布種（W）で広適応性、好アルカリ性の*Achnanthes hungarica*の産出が特徴的である。有機汚濁について好清水性種と好汚濁性種では好汚濁性種が多く、pHに対しては好アルカリ性種が多く見られた。

6層中部（試料5）から5層上部（試料2）は、14層（試料8）から6層下部（試料6）の産出傾向に似るが、上述の種に減少傾向が見られる点で異なる。

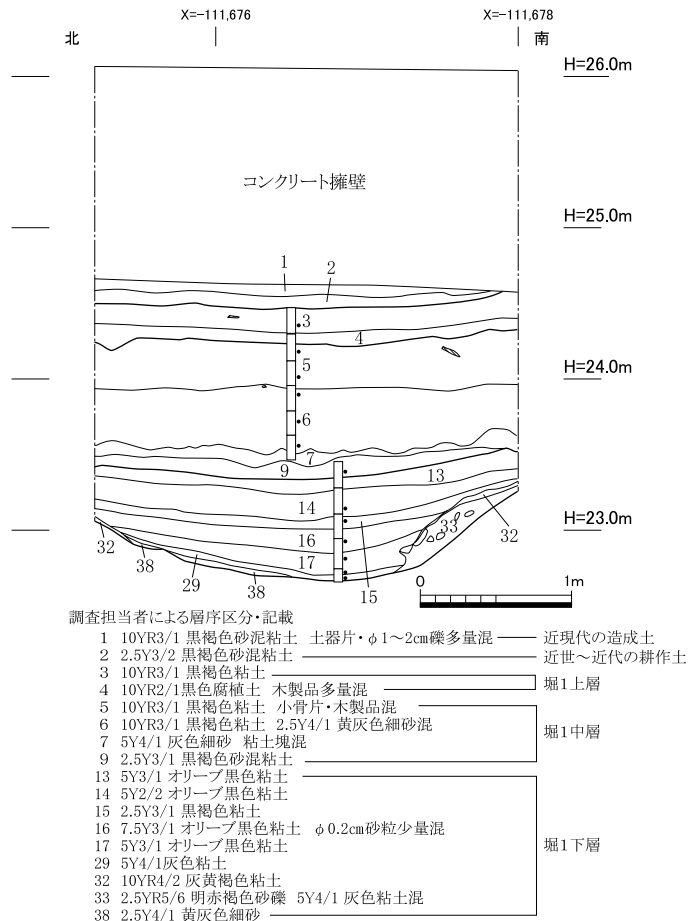
6層中部（試料5）から5層上部（試料2）で検出した珪藻殻の数は順に350個、358個、336個、395個であり、珪藻殻数は 1×10^8 個、 3×10^7 個、 2×10^7 個、 3×10^7 個と推定される。*Staurosira construens* var.*venter*と*Melosira varians*、*Achnanthes hungarica*の産出率が上位ほど減る。*Planothidium lanceolatum*のやや多い産出が特徴的である。5層上部（試料2）では広布種（W）で好清水性、中性の*Navicula cryptotenella*が多く見られる。有機汚濁に対しては、6層下部（試料6）から5層下部（試料3）で好清水性種と好汚濁性種では好汚濁性種が多く、5層上部（試料2）では好清水性が優先する。pHに対して

表1 試料リスト

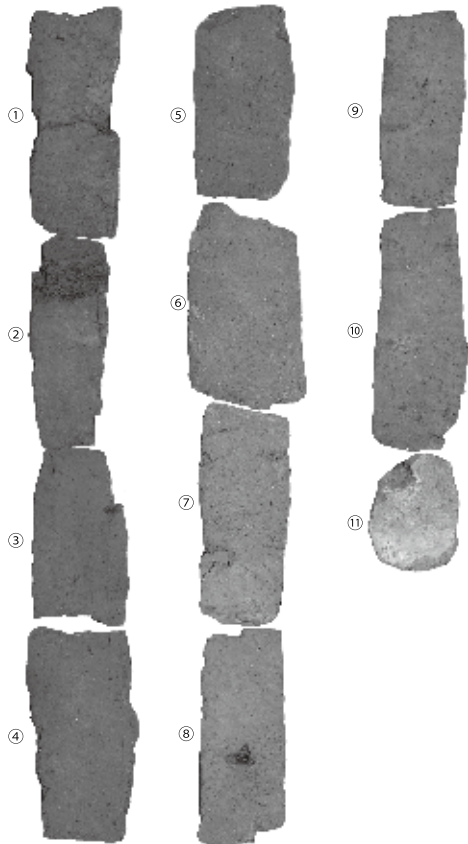
試料番号	採取場所	層位	乾燥重量(g)
1	2区東壁	3層	0.37
2		5層上部	0.41
3		5層下部	0.40
4		6層上部	0.44
5		6層中部	0.46
6		6層下部	0.39
7		9層	0.38
8		14層	0.39
9		15層	0.37
10		16層	0.41
11		17層上部	0.43
12		17層下部	0.43
13		29層	0.38



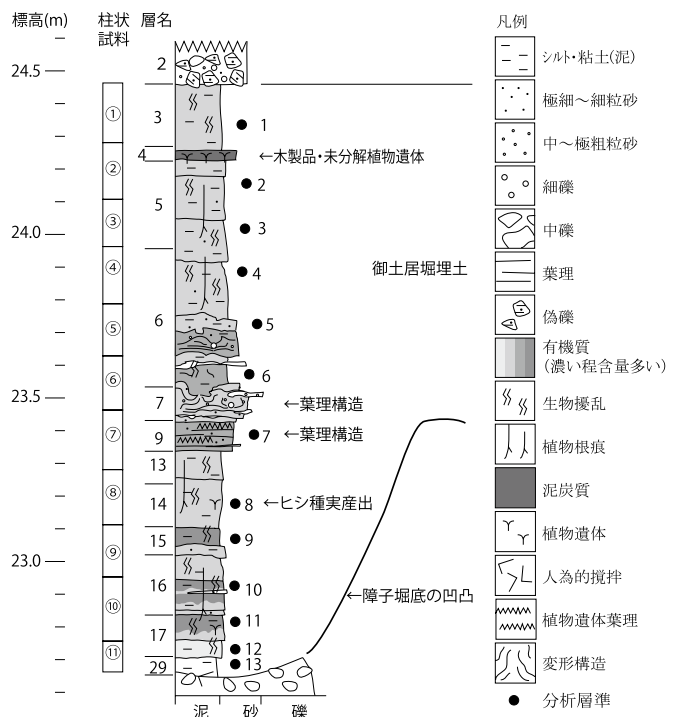
a) 調査地点・周辺位置図



b) 2区東壁の断面図・試料採取位置



c) 試料写真



d) 調査地点の堆積層の模式柱状図

図1 調査地点の位置と層序および分析試料採取位置

表2 堆積物中の珪藻化石産出表

(種群は千葉・澤井(2014)、水質情報は渡辺ほか(2005)による)

分類群		生態性		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	C1	代	好清	好ア						1	1	4			
2	<i>Ctenophora pulchella</i>	U2		好清	好ア			3		1		3				
3	<i>Nitzschia levidensis</i>	U3		好汚	中性	2		1	1		1			2	1	
4	<i>Cocconeis placentula</i>	F	不	広適	好ア					2	7	6				
5	<i>Cymbella tumida</i>	F	不	好清	好ア	1						2			2	
6	<i>Eunotia bilunaris</i>	F	不	広適	真酸			2	5			5				
7	<i>Sellaphora pupula</i>	F	不	好汚	中性	1	7	12	2	4	9	8	7	3	1	6
8	<i>Cymbella turgidula</i>	K	主	好清	真ア	1		1						1	1	7
9	<i>Melosira varians</i>	K	主	広適	好ア	1	1	11	53	17	78	36	41	9	5	38
10	<i>Planothidium lanceolatum</i>	K	主	好清	中性	57	24	49	40	9	15	24	14	6	29	61
11	<i>Cyclotella meneghiniana</i>	L	主	好汚	好ア	3	7	9	8	9	6	6	13		36	3
12	<i>Aulacoseira ambigua</i>	N	標	広適							1	3			5	
13	<i>Cymbella aspera</i>	O	主	広適	真ア			1								
14	<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	主	広適	好ア		2			1						
15	<i>Navicula elginensis</i>	O	主	広適	中性		3	1	1	1						3
16	<i>Pinnularia gibba</i>	O	主	広適	好酸	1	1	1	1	1			2		1	5
17	<i>Pinnularia nodosa</i>	O	主			1	1									
18	<i>Amphora montana</i>	Qa	不	広適	好ア	1	2	1	1							
19	<i>Diademesis contenta</i> f. <i>biceps</i>	Qa	不	好清	好ア	2	9	5	2	4	2	1	2	1	1	3
20	<i>Hantzschia amphioxys</i>	Qa	不	広適	中性	13	6	3		1					1	2
21	<i>Luticola mutica</i>	Qa	不	好汚	好ア	11	7	2	4		1	1				1
22	<i>Pinnularia borealis</i>	Qa	不	広適	好酸		2									
23	<i>Achnanthydium minutissimum</i>	Qb	不	広適	中性				2	2	3	1	1	3	5	22
24	<i>Diademesis confervacea</i>	Qb	不	好汚	好ア	14	22	16	12	10	12	9	11	2	3	11
25	<i>Achnanthes hungarica</i>	W		広適	好ア	6	25	50	37	94	42	64	55	15	8	5
26	<i>Amphora ovalis</i>	W		好清	好ア	1	2	3	4	2	4	2		1	2	2
27	<i>Amphora pediculus</i>	W		好清	好ア	2	4			2	7		5	2	2	7
28	<i>Bacillaria paxillifer</i>	W		広適	好ア	2	3			4				2	3	5
29	<i>Caloneis bacillum</i>	W		広適	好ア	1		1								1
30	<i>Caloneis sillicula</i>	W		広適	好ア		2			1					3	2
31	<i>Encyonema silesiacum</i>	W		好清	中性		5	4		1	1	4	3	3	1	8
32	<i>Frustulia vulgaris</i>	W		広適	中性	1	4		1		2	1	4			2
33	<i>Gomphonema augur</i>	W								2						
34	<i>Gomphonema parvulum</i>	W		広適	中性	11	22	23	19	7	10	2	2	2	2	4
35	<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>	W		広適	中性				1				1			
36	<i>Gomphonema truncatum</i>	W		好清	好ア							1	3	3	2	2
37	<i>Gyrosigma procerum</i>	W		広適	中性	2	3		4	2	1	6	1		3	30
38	<i>Navicula capitata</i>	W		広適	中性		7	4	6	9	5	20	2	2	1	7
39	<i>Navicula cryptocephala</i>	W		広適	中性	2	21	25	9	11	11	12	1		1	9
40	<i>Navicula cryptotenella</i>	W		好清	中性	8	56	16	17	6	4	9	2	2	2	14
41	<i>Navicula oppugnat</i>	W		好清	中性		3	1		2	7	26			5	65
42	<i>Neidium affine</i>	W				4		1	1			1			1	1
43	<i>Nitzschia acicularioides</i>	W		広適	真ア	1	22		6	1	4	7	2	8	36	
44	<i>Nitzschia amphibia</i>	W		広適	好ア		5	2	5	6	6	12	6	9	40	2
45	<i>Pinnularia marchica</i>	W		真酸		7	11		2	3		2				2
46	<i>Surirella angusta</i>	W		広適	中性		11	8	9	8	3	5	3	1	1	1
47	<i>Surirella ostentata</i>	W					1			2						
48	<i>Synedra ulna</i>	W		広適	好ア	1	3	4	6	9	4	5	8	4	9	10
49	<i>Achnanthes</i> spp.	U5				3	13	24	6	23	15	26	21	20	17	29
50	<i>Amphora</i> spp.	U5						2			1	1			1	1
51	<i>Cyclotella</i> spp.	U5					3	3	2	7	1	3		5	10	22
52	<i>Cymbella</i> spp.	U5						1				1				
53	<i>Eunotia</i> spp.	U5					3		6	7		11	5	1	3	
54	<i>Eunotia veneris</i>	U5						4	1				1		1	
55	<i>Gomphonema biceps</i>	U5		好清	真ア	1	11	6	10	4		1	5	3	5	4
56	<i>Gomphonema</i> spp.	U5						5	2							
57	<i>Gomphonema turris</i>	U5					1	1	1		1	1				
58	<i>Navicula</i> spp.	U5				1	22	20	21	4	10	5	7	3	13	17
59	<i>Nitzschia parvuloides</i>	U5		広適	中性	1	2	1	2	1						1
60	<i>Nitzschia</i> spp.	U5				9	18	14	16	18	12	17	13	2	5	7
61	<i>Pinnularia</i> spp.	U5					1	3	3						2	1
62	<i>Pinnularia viridiformis</i>	U5						2								1
63	<i>Stauroneis</i> spp.	U5					1	2			1					1
64	<i>Staurosira construens</i> var. <i>venter</i>	U5		好汚	好ア	1	4	22	18	67	37	84	186	197	3	
65	<i>Surirella</i> spp.	U5											1			1
66	<i>Synedra rumpens</i> var. <i>familiaris</i>	U5		好清	好ア		1	2	3	1	7	3	3		1	1
67	<i>Amphora fontinalis</i>	U6		好ア							4					
68	Unknown	U6				1										13
1	海水藻場	C1				0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	0
2	海～汽水不定・不明種	U2				0	0	0	3	0	0	1	0	3	0	0
3	汽水不定・不明種	U3				0	2	0	1	1	0	0	1	0	0	2
4	淡水底生	F				1	8	12	4	4	14	10	14	13	3	1
5	中～下流性河川	K				2	58	35	103	57	87	51	65	23	12	68
6	最下流性河川	L				0	3	7	9	8	9	6	6	13	0	36
7	湖沼沼沢湿地	N				0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	5
8	沼沢湿地付着生	O				2	7	3	2	2	1	1	0	2	0	1
9	陸生A群	Qa				27	26	11	6	6	2	3	3	1	1	5
10	陸生B群	Qb				14	22	16	14	12	15	10	12	5	8	33
11	広布種	W				44	193	162	122	172	107	155	127	49	78	108
12	淡水不定・不明種	U5				15	76	90	94	88	107	110	140	225	237	83
13	その他不明種	U6				1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
1	海生種					0	0	0	3	0	0	1	1	4	4	0
2	汽水生種					0	2	0	1	1	0	0	1	0	0	2
3	淡水生種					105	393	336	354	349	342	346	368	334	339	336
4	その他不明					1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
1	好清水性種		好清			15	148	59	89	62	30	47	72	38	25	66
2	広適応性種		広適			43	126	158	158	181	172	172	139	66	79	144
3	好汚悪性種		好汚			26	42	41	50	41	97	61	110	201	203	53
1	真酸性種		真酸			7	11	0	4	3	5	2	0	5	0	2
2	好酸性種		好酸			1	3	1	1	1	0	0	0	2	0	1
3	中性種		中性			39	209	121	124	94	60	92	77	28	21	93
4	好アルカリ性種		好ア			42	92	107	159	179	233	187	231	262	272	123
5	真アルカリ性種		真ア			2	12	29	11	10	1	5	12	5	14	41
合計						106	395	336	358	350	342	351	370	338	343	338
堆積物1g中の殻数(個)						4×10 ⁵	3×10 ⁵	2×10 ⁷	3×10 ⁷	1×10 ⁸	7×10 ⁷	7×10 ⁷	1×10 ⁸	1×10 ⁸	8×10 ⁷	1×10 ⁷

代＝代表種：その環境のみに出現し、かつ高率である種

主＝主要構成種：他の環境にも出現するが、そこの群集において主要な構成要素となる種

標＝標徴種：高率には出現しないが、その環境のよい指標となる種

不＝不定：千葉・澤井 (2014) に記載されているが、上記には属さない種

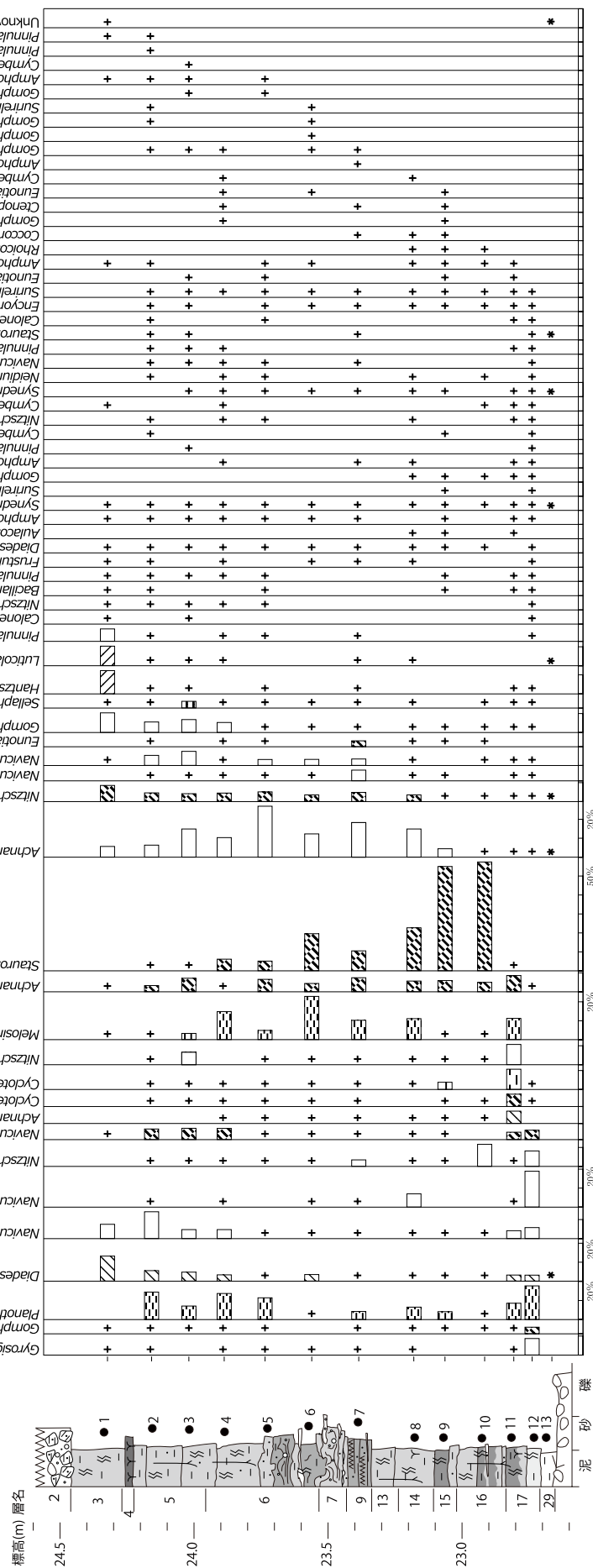
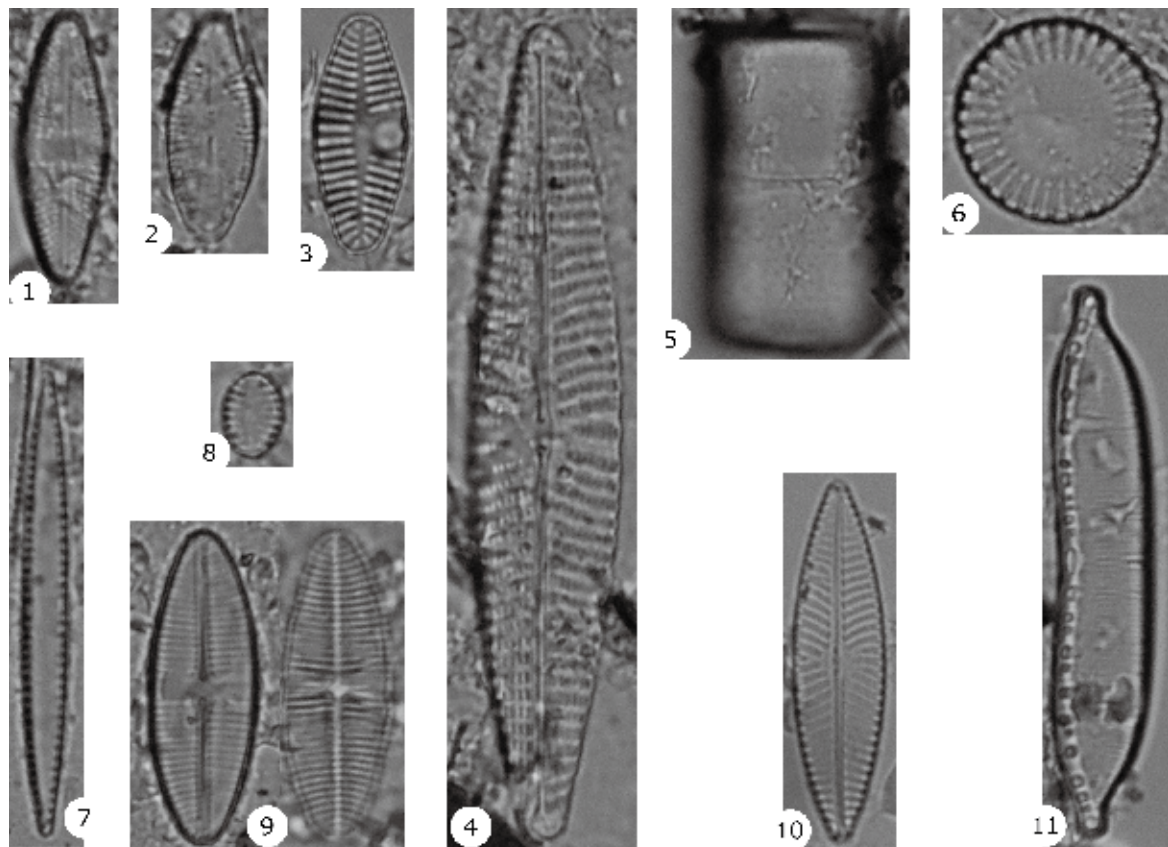


図2 珪藻ダイアグラム

表3 本分析で登場した環境指標種群

種群名(以下、「指標種群」を略す)	環境指標となる現生種の出現環境や生態学的特徴など
海水藻場	C1 塩分が12‰以上の水域の海藻に付着する（アマモなど）
海～汽水不定・不明種	U2 海域から汽水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種
汽水不定・不明種	U3 汽水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種
淡水底生	F 塩分が2‰以下の淡水域の底質や水草に付着する（河岸や湖岸）
中～下流性河川	K 中下流域に出現する（河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地）
最下流性河川	L 最下流域の三角州に集中して出現する
湖沼沼沢湿地	N 湖沼において浮遊性種および付着生種として優占する
沼沢湿地付着生	O 水深が1.0m内外で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢湿地において、付着状態で生育する
陸生A	Qa 耐乾性が強い
陸生B	Qb 陸生A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する
広布種	W 淡水域に生育し、生態に幅のある種
淡水不定・不明種	U5 淡水域域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種
不明種	U6 生育域はじめ生態情報が得られなかった種



括弧内は試料番号 スケールは0.01mm

1. *Luticola mutica* (4) 2. *Diadesmis confervacea* (10) 3. *Planothidium lanceolatum* (4)
 4. *Navicula oppugnata* (4) 5. *Melosira varians* (4) 6. *Cyclotella meneghiniana* (4)
 7. *Nitzschia acicularioides* (10) 8. *Staurosira construens* var. *venter* (10)
 9. *Achnanthes hungarica* (4) 10. *Navicula cryptotenella* (10) 11. *Hantzschia amphioxys* (4)

図3 産出した珪藻殻

は、6層中部（試料5）と6層上部（試料4）で好アルカリ性種が多く、5層下部（試料3）と5層上部（試料2）で中性種が多く見られた。

3層（試料1）では 10^6 個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 4×10^6 個と推定される。陸生B群の *Diadlesmis confervacea* と陸生A群の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* の産出が見られる。

（4）考察

調査地点の御土居の堀は、堀底に畝状の高まりを有する障子堀からなる。堀の深さは約1.8mで、底部の畝状高まりの高さは約0.8mである。障子堀の凹地は、基底部に塊状無層理をなす、有機質を含まないシルト質粘土（泥）の29層が薄く堆積した後、生物等の擾乱により塊状構造をなす有機質混じり泥～有機質泥からなる17～13層で充填されている。17層～15層は障子堀の凹地内に水平に堆積し、特に16層・15層では有機質含量が相対的に多くなる層準を挟在している。これに対して、14層・13層は畝状高まりを覆うように堆積する、均質な有機質泥からなる。また14層からは、水面に葉を広げる浮葉植物のヒシの種子が出土している。13層の上位では層相が変化し、植物遺体葉理を含む葉理構造が発達する砂質泥～泥質砂層の9層、葉理構造が確認される泥混じり細粒・中粒砂層の7層が積層する。上方粗粒化し、水流によって形成される葉理構造が確認されるようになる。その上位には砂質泥～有機質泥からなる6層・5層が累重する。6層下部には不連続な細粒砂の薄層を挟在するが、6層上部から5層にかけて挟在しなくなる。なお、9層から6層下部までの堆積物は変形しており、新旧の堆積物が同時に変形しているようにみえる。5層の上位には木製品などを含む植物遺体が集積する4層、著しく擾乱された塊状無層理をなす砂混じり泥の3層が累重する。発掘調査時の層序区分では、29層～13層が堀1下層、9層～5層が堀1中層、4層・3層が堀1上層に大区分されており、出土遺物の時代性から、堀1上層が17世紀末～18世紀、堀1下層（38～13層）が17世紀半ばに形成されたと推定されている。また、石川・辻（2022）は、18世紀初頭の「御土居絵図」に御土居の堀が図示されていないことから、16世紀末～18世紀初頭までに累重したことを推定している。以上の層相を踏まえ、珪藻化石群集から推定される堀の堆積環境について検討する。

障子堀基底の畝状高まりの凹地を充填する堆積物のうち、凹地底に堆積した泥層の29層は、珪藻殻数が著しく少なく、水域環境を特定することが難しい。ただし、少ないながら陸生珪藻や好清水性種が産出する状況と堆積状況から、29層は堀開削後の滞水域において、堀斜面などの表層物質が流入して、ごく短期間に形成された堆積物と推定される。17層からは水生珪藻が豊富に産出することから比較的安定した水域環境が継続していたことが推定される。

17層では中～下流性河川（K）や最下流性河川（L）の産出や好清水性種が多く見られ、流水環境であった可能性が考えられる。16層（試料10）と15層（試料9）では、河川指標となる珪藻が減少し、湿地環境で多産した例（石川ほか，2014）のある *Staurosira construens* var. *venter* が多産しており、やや汚濁したアルカリ性の停水域だった可能性がある。以上のことと堆積状況から、17層から16・15層形成期にかけて、滞水域の水位が低下し、水深の浅い湿地のような水域に変化した

ことが推定される。

14層（試料8）から5層下部（試料3）では中～下流性河川種（K）が増加する。また、比較的多産する広布種（W）の*Achnanthes hungarica*は、河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに出現して、流水に適応した水中の底で付着生活する種群でもある。これらの群集組成から、流水環境であった可能性が考えられ、水質も徐々にきれいで中性の水質に推移している。5層上部（試料2）で好清水性が増えており、きれいな水の流れる流水環境が推定される。珪藻化石群集の変化と、現地での堆積状況をふまえると、14層から5層形成期の堀内は、基本的には緩やかながら水の流れが生じながら、わずかに水の交換があるような水域環境に変化したと考えられる。ただし、9層・7層形成期には、河川や水路などの堀以外の場所から、洪水堆積物などが流入したことが推定される。

3層（試料1）では陸生珪藻が多く、堀内の水位は低下し、ジメジメとした陸地となったと推定される。

以上、今回調査地における御土居の堀は、開削後、多少の水域環境の変化が生じていたが、基本的には滞水環境が継続していたと考えられる。調査時の層序区分に基づいて堆積環境を整理すると、堀1下層の下部形成期は、水位変動のある、水深の浅い、汚濁したアルカリ性の停水域であったが、上部形成期になると、水深が大きくなるともに、周囲の河川や水路から水が供給され、きれいで中性の水が流れる環境へ変化し、水質改善されていたことが推定される。堀1中層形成期になると、周囲から砂質堆積物や泥質堆積物が流れ込む状況が認められたが、基本的には水深のある水が流れる水域環境が継続していたとみられる。堀1上層形成期には、埋積の進行に伴って水位が低下し、湿地化したと推定される。

御土居の堀の珪藻化石群集は、本地点の北側約300mに位置する平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町、御土居跡の堀でも確認されている（石川・辻，2022）。そこでの堀の堆積状況は、堀埋土下部の畝状高まりに仕切られた凹地をなす堀底の9層で富栄養化した底部に泥が堆積する極浅い滞水域、堀埋土中・上部の6層・5層で相対的に水深が大きくなり、緩やかな水の流れのある、わずかに水の交換があるような水域環境に変化していることが確認されている。このような堆積状況は、今回調査地の結果とも良く一致しており、御土居南西部の堀内の普遍的な堆積環境を反映している可能性が高く、障子堀の畝状高まり充填後に水域環境が変化していることが推測される。

（石川 智・辻本裕也）

引用文献

千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新. *Diatom*, 30, 7-30.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑. 784p, 内田老鶴園.

石川 智・高田健太郎・鹿島 薫（2016）北海道浜中町藻散布沼における津波堆積物中の珪藻遺骸群集. 地 形, 37 (2), 261-268.

石川 智・辻 康男（2022）（1）珪藻分析.「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-15 平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡」, 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 24-28.

付表1 木製品一覧表

法量の()は残存値

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			木取	残存率(%)	備考
			長さ	幅	厚さ			
木1	容器底板	1区 堀1 下層	径7.2	－	0.6	柃目	80	外面に2列で「×□□□ ^{〔山19〕} ×基也」の墨書。
木2	木簡	1区 堀1 上層	(3.2)	1.8	0.2	柃目	－	片面に「×□□」の墨書。 ^{〔延々〕〔字々〕}
木3	木簡	2区 堀1 中層	(9.3)	(2.7)	0.2	板目	－	片面に「□十二月」の墨書。
木4	木簡	1区 堀1 上層	(10.6)	3.5	0.4	板目	－	片面に「×□□百卅入 ^{〔二〇〕} 」の墨書。
木5	木簡	1区 堀1 中層	(10.9)	(3.0)	0.6	柃目	－	片面に「□□」の墨書。 ^{〔一〇〕} 上部に木釘が残存し、3箇所穿孔あり。
木6	木簡	2区 堀1 上層	10.4	4.5	1.2	柃目	100	片面に「仁儀禮智信」の墨書。 両面に刃痕が格子状に残る。
木7	木簡	2区 堀1 中層	(11.8)	(1.3)	0.2	板目	－	片面に「□□□□」の墨書。
木8	木簡	3区 堀1 上層	(7.5)	0.8	0.5	柃目	－	片面に墨書が確認できるが、文字は判読できない。
木9	木簡	3区 堀1 上層	(18.3)	(1.3)	0.8	板目	－	片面に墨書が確認できるが、文字は判読できない。
木10	木簡	1区 堀1 上層	(13.4)	1.3	1.1	板目	－	4面に「文字不明」 ^{〔院々〕} 「□□□ ^{〔阿々〕} □ □」「南□□□□□」 「文字不明」の墨書。
木11	木簡	3区 堀1 上層	13.9	2.6	0.6	板目	100	片面に「□□□生主水 ^{〔義々〕} 」の墨書。 上端部の左右に切り込み、紐で縛った痕跡。
木12	木簡	1区 堀1 上層	(12.8)	(2.2)	0.3	柃目	－	片面に「□□□ ^{〔打々〕} □ □」の墨書。
木13	木簡	2区 堀1 中層	14.9	2.5	0.4	板目	95	両面に「いたミや□兵へ ^{〔諸々〕} 」「八十文」の墨書。 上部に1箇所穿孔あり。
木14	木簡	2区 堀1 中層	(13.3)	2.8	0.5	板目	－	両面に「□□十郎 ^{〔導々〕} 」「□」の墨書。
木15	木簡	1区 堀1 上層	(12.7)	2.3	0.8	柃目	－	両面に「㐂八右衛門」「㐂□」の墨書。 上部に1箇所穿孔あり。
木16	木簡	2区 堀1 上層	11.5	2.5	0.3	板目	100	墨書は認められないが、圧痕で文字を確認。
木17	棒	1区 堀1 上層	(12.0)	1.8	1.6	板目	100	杭か。
木18	棒	3区 堀1 中層	(12.5)	1.2	0.9	板目	－	窪みが1箇所、穿孔が4箇所。
木19	棒	3区 堀1 中層	(14.9)	径0.9	－	板目	－	不等間隔に刻み目あり。
木20	棒	3区 堀1 中層	10.5	－	0.7	－	－	端部が炭化。火付棒か。
木21	棒	3区 堀1 中層	(15.7)	－	1.4	－	－	
木22	箸	1区 堀1 上層	20.7	0.5	0.5	－	100	
木23	箸	1区 堀1 上層	22.0	0.5	0.5	－	100	
木24	箸	2区 堀1 中層	22.5	0.7	0.5	－	100	
木25	箸	2区 堀1 中層	23.6	0.6	0.6	－	100	
木26	箸	2区 堀1 下層	24.0	0.6	0.5	－	100	
木27	箸	2区 堀1 下層	25.4	0.7	0.5	－	100	

法量の()は残存値

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			木取	残存率 (%)	備考
			長さ	幅	厚さ			
木28	指櫓栓	2区 堀1 上層	4.8	4.5	(4.5)	板目	100	全体に黒漆と赤漆を施す。「中一」と赤漆で書く。
木29	栓	3区 堀1 上層	6.5	3.4	2.9	－	100	
木30	栓	3区 堀1 上層	8.5	3.6	3.5	－	100	
木31	栓	2区 堀1 上層	7.9	3.2	3.1	－	100	
木32	栓	1区 堀1 上層	5.4	2.8	2.3	－	100	
木33	栓	2区 堀1 上層	4.0	2.5	2.5	－	100	
木34	糸巻	2区 堀1 上層	13.8	2.2	1.3	板目	100	内より腹面に径0.7cmの小孔を2箇所穿つ。
木35	糸巻	3区 堀1 中層	14.1	2.6	1.2	板目	100	内より腹面に径0.7cmの小孔を2箇所穿つ。
木36	糸巻	1区 堀1 上層	(4.8)	1.9	1.1	板目	40	
木37	人形	1区 堀1 上層	幅 1.6	奥行 2.6	高さ 4.7	板目	70	サルを象る。足部欠損。
木38	横櫛	3区 堀1 中層	(3.9)	(2.4)	背厚 1.2	板目	30	背と歯の側面に黒漆を施す。
木39	横櫛か	3区 堀1 中層	(10.6)	(3.2)	1.3	板目	－	未製品か。
木40	人形頭部	1区 堀1 上層	幅 2.8	奥行 3.1	高さ 9.4	板目	100	
木41	人形頭部	1区 堀1 上層	幅 2.7	奥行 2.2	高さ 10.0	板目	100	一部炭化する。
木42	人形頭部	2区 堀1 中層	幅 2.5	奥行 2.5	高さ 9.1	柾目	100	立烏帽子子形。
木43	人形頭部	2区 堀1 上層	幅 3.3	奥行 3.2	高さ 10.5	板目	100	立烏帽子子形。
木44	棕櫚箒	1区 堀1 上層	(16.9)	2.8	1.5	－	100	
木45	箆	2区 堀1 上層	(10.7)	2.0	0.2	柾目	95	漆工道具か。
木46	箆	2区 堀1 上層	13.0	1.4	1.0	板目	100	片刃箆。0.5cmの孔を穿つ。
木47	箆	2区 堀1 上層	23.2	2.5	0.3	板目	100	片刃箆。
木48	箆	2区 堀1 上層	22.7	3.4	0.2	柾目	100	片刃箆。
木49	箆	2区 堀1 中層	(10.2)	3.7	0.3	柾目	50	片丸箆。2箇所の穿孔あり。
木50	箆	3区 堀1 中層	(10.9)	3.6	0.8	柾目	－	片丸箆。
木51	箆	3区 堀1 中層	25.8	2.1	0.6	板目	80	片丸箆。
木52	用途不明品	1区 堀1 上層	(4.6)	2.2	0.3	柾目	10	題箋軸の頭部か。
木53	用途不明品	3区 堀1 中層	5.3	1.5	0.4	柾目	100	
木54	用途不明品	2区 堀1 上層	(15.3)	4.2	0.4	柾目	－	丸箆か。
木55	漆刷毛	2区 堀1 中層	(9.3)	2.1	0.3	柾目	－	赤漆を施す。

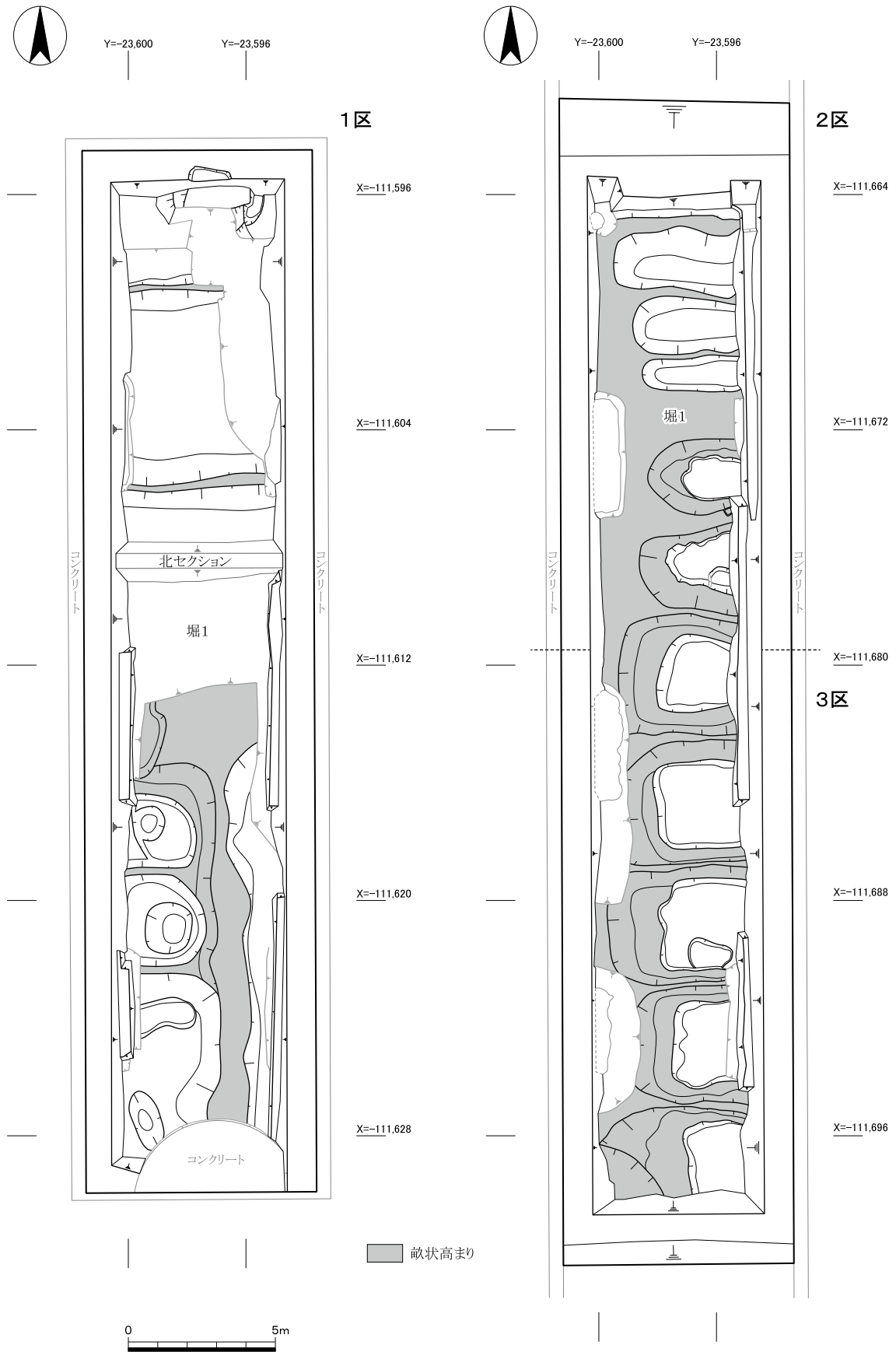
法量の()は残存値

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			木取	残存率 (%)	備考
			長さ	幅	厚さ			
木56	用途不明品	1区 堀1 下層	12.0	3.5	0.8	板目	100	
木57	刀身模造品	2区 堀1 下層	(12.3)	1.8	0.5	板目	－	
木58	刷毛	1区 堀1 上層	11.5	9.5	0.9	柾目	100	
木59	刷毛	1区 堀1 上層	(14.6)	(7.7)	1.2	柾目	80	
木60	刷毛	2区 堀1 上層	11.3	(14.1)	0.8	柾目	70	
木61	幅広篋状工具	2区 堀1 上層	13.5	17.1	2.0	柾目	90	
木62	平筆	2区 堀1 中層	22.6	2.5	0.8	柾目	100	
木63	ミニチュア椀	1区 堀1 上層	口径 4.9	底径 2.6	器高 2.3	芯持・ 縦木	90	
木64	ミニチュア椀	2区 堀1 中層	口径 4.3～5.3	底径 2.7～3.2	器高 3.0	芯持・ 縦木	70	平面形が楕円形。
木65	ミニチュア椀	3区 堀1 中層	口径 5.0	底径 3.0	器高 3.5	芯持・ 縦木	50	
木66	ミニチュア椀	3区 堀1 中層	口径 5.3	底径 2.2	器高 4.0	芯持・ 縦木	60	
木67	蓋または底	3区 堀1 中層	径8.1	－	0.7	柾目	100	
木68	蓋または底	2区 堀1 中層	径12.6	－	0.7	柾目	100	
木69	蓋または底	3区 堀1 下層	径11.2	－	0.9	柾目	100	両面に漆。
木70	蓋または底	3区 堀1 中層	(11.2)	(4.6)	0.3	柾目	40	黒漆で模様を描く。
木71	漆器椀蓋	2区 堀1 中層	口径 11.8	－	器高 3.6	横木	100	外面：黒漆、外面つまみ内に赤漆で小振りの梅文を描く。
木72	漆器椀	3区 堀1 下層	－	底径 4.3～6.8	器高 (5.1)	横木	70	外面：黒漆に赤漆で丸文を描く。内面：赤漆。
木73	漆器椀	2区 堀1 上層	－	－	器高 (4.6)	横木	90	外面：黒漆。内面：赤漆。
木74	漆器椀	2区 堀1 中層	－	口径 (12.0)	器高 (5.8)	横木	80	外面：黒漆に金と赤漆で巴文を3方向に描く。両面：赤漆。
木75	漆器椀	1区 堀1 下層	－	底径 7.8	器高 (8.2)	横木	80	外面：黒漆に赤漆で交差した植物文を描く。内面：赤漆。 高台内に二重の山形の線刻あり。
木76	漆器皿	3区 堀1 上層	口径 23.0	底径 16.2	器高 2.2	横木	40	外面：黒漆。内面：黒漆の上から赤漆で細線を引く。
木77	球状木製品	2区 堀1 下層	4.2	4.5	(2.4)	芯持	95	毬杖に用いられる毬の可能性はある。
木78	球状木製品	2区 堀1 上層	8.5	8.4	4.9	芯持	100	毬杖に用いられる毬の可能性はある。
木79	灯台	2区 堀1 上層	14.7	13.2	4.1	板目	－	
木80	下駄	1区 堀1 上層	15.9	8.2	5.4	柾目	100	連歯。踵部分に「日」と線刻あり。沈着した汚れが残る。
木81	下駄	2区 堀1 中層	22.4	(7.0)	6.8	板目	80	差歯露卯。
木82	下駄歯	2区 堀1 中層	8.0	(7.1)	1.7	板目	－	
木83	下駄歯	2区 堀1 上層	(7.0)	11.8	2.9	板目	－	鉄釘残存。

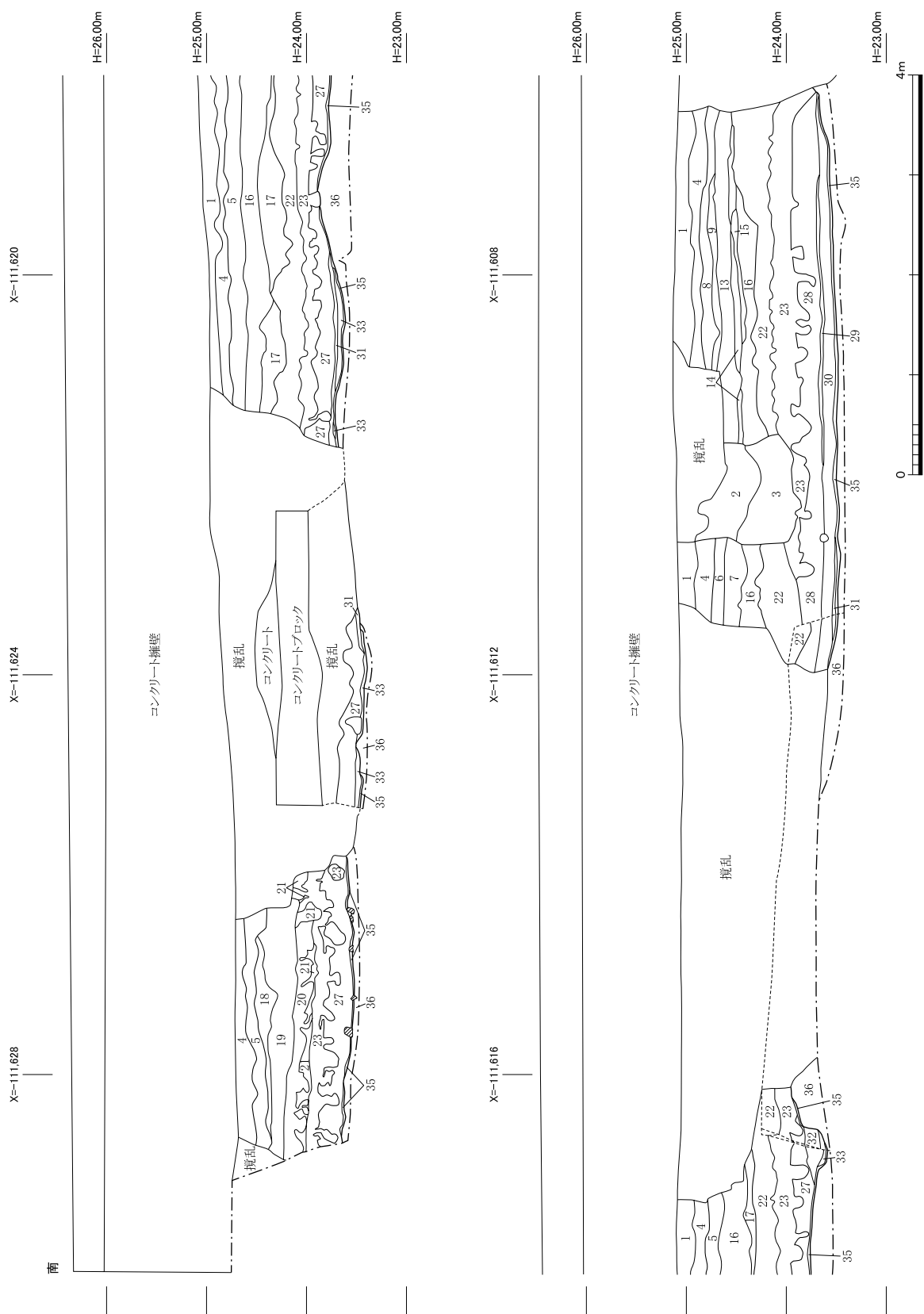
法量の()は残存値

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			木取	残存率 (%)	備考
			長さ	幅	厚さ			
木84	用途不明品	2区 堀1 中層	2.9	(2.4)	0.8	板目	－	孔が2箇所あり。
木85	用途不明品	1区 堀1 上層	4.5	(3.0)	0.5	柃目	－	
木86	用途不明品	3区 堀1 上層	4.2	3.6	2.9	板目	95	下端部に穿孔あり。
木87	用途不明品	2区 堀1 中層	3.7	3.5	1.4	柃目	100	
木88	用途不明品	1区 堀1 上層	3.2	(3.5)	2.0	柃目	－	中央に穿孔あり。
木89	用途不明品	1区 堀1 上層	5.7	6.2	0.8	板目	－	
木90	用途不明品	2区 堀1 中層	5.6	5.6	1.0	柃目	100	装飾部品か。
木91	用途不明品	2区 堀1 上層	6.7	4.9	1.4	柃目	95	
木92	用途不明品	3区 堀1 中層	6.8	6.5	1.2	板目	100	
木93	用途不明品	2区 堀1 中層	10.3	(5.5)	0.6	柃目	50	中心に孔あり。
木94	用途不明品	2区 堀1 中層	8.5	6.7	0.5	柃目	100	刻線あり。
木95	用途不明品	2区 堀1 中層	17.3	3.5	0.8	板目	100	木簡のような形状。
木96	用途不明品	3区 堀1 上層	11.1	径4.3	鰭部厚 0.6	芯持	100	錘か。
木97	用途不明品	2区 堀1 中層	(8.7)	3.3	1.8	芯持	－	木98と同一個体。刃模造品か。
木98	用途不明品	2区 堀1 中層	(15.4)	3.3	1.8	芯持	－	木97と同一個体。刃模造品か。
木99	用途不明品	3区 堀1 上層	(14.4)	4.7	4.1	板目	－	建築部材か。
木100	用途不明品	2区 堀1 上層	(9.4)	(3.4)	2.3	板目	－	建築部材か。
木101	用途不明品	3区 堀1 上層	(11.3)	(6.0)	4.5	芯持	－	建築部材か。
木102	用途不明品	2区 堀1 中層	(15.4)	(9.6)	2.5	柃目	－	建築部材か。

図 版



調査区平面図 (1 : 200)



X=-111,604

X=-111,600

X=-111,596

北

H=26.00m

コンクリート擁壁

H=25.00m

攪乱

H=24.00m

コンクリートブロック

H=23.00m



1 区西壁断面図 2 (1 : 60)

- 1 10YR4/6 褐色細砂 φ0.5~10cm礫少量混 陶磁器・レンガ・炭化物混 近現代の造成土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト〜粘土
- 3 10Y3/1 オリーブ黒色シルト〜粘土 近代の土坑
- 4 10YR3/2 黒褐色細砂と2.5Y5/6 黄褐色中砂の互層 近世〜近代の耕作土
- 5 2.5Y4/2 黄褐色シルトと2.5Y5/6 黄褐色中砂の互層
- 6 10YR4/2 灰黄褐色細砂と2.5Y8/1 灰白色細〜粗砂の互層
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色細〜中砂 2.5Y5/3 黄褐色中〜粗砂混
- 8 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1~3cm礫少量混
- 9 2.5Y4/1 黄灰色細砂
- 10 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物混
- 11 10YR3/1 黒褐色シルト
- 12 10Y4/1 灰色シルト
- 13 2.5Y8/1 灰白色中〜粗砂 φ1~5cm礫少量混
- 14 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 15 2.5Y5/4 黄褐色粗砂
- 16 2.5Y3/1 黒褐色粘土 小骨片混
- 17 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト〜粘土 木片・炭化物混

堀1上層

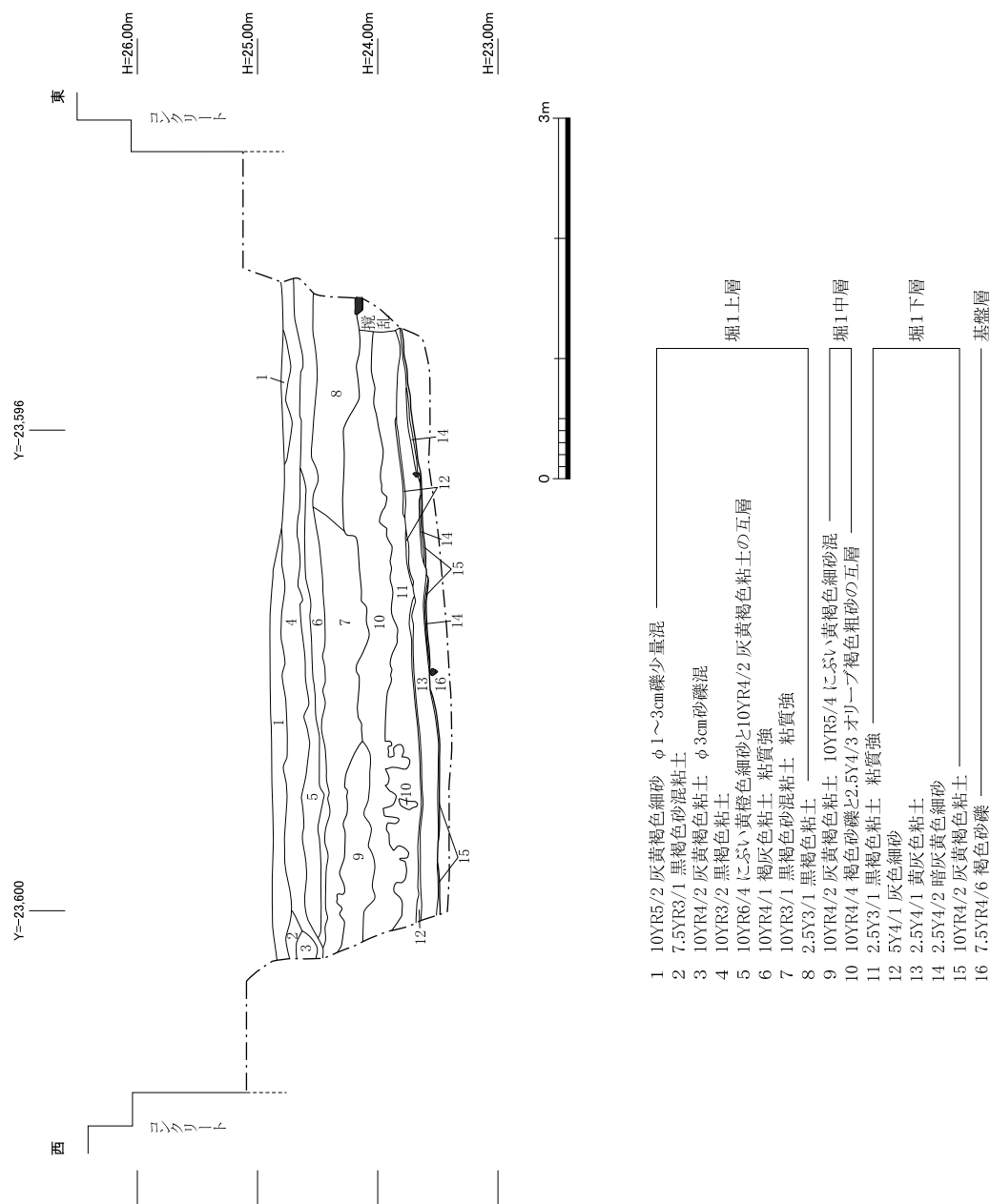
- 18 5Y8/2 灰白色中〜粗砂 φ1~4cm礫少量混
- 19 2.5Y3/2 黒褐色シルト〜細砂 10YR5/8 黄褐色細〜中砂が塊状に混
- 20 10YR8/1 灰白色細〜粗砂 粗砂・中砂・細砂の順にラミナを形成
- 21 5YR5/1 褐灰色粘土 炭化物含
- 22 7.5Y4/1 灰灰色細〜粘土 2.5GY 灰白色細砂が塊状に混
- 23 2.5Y8/1 灰白色細〜粗砂 粗砂・中砂・細砂の順にラミナを形成
- 24 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
- 25 5Y7/1 灰白色中〜粗砂 φ1~5cm礫混
- 26 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂
- 27 2.5Y5/1 黄灰色シルト〜粘土 下部に細砂堆積
- 28 10Y4/1 灰色粘土
- 29 7.5GY 暗緑灰色細砂〜シルト
- 30 7.5GY 暗緑灰色粘土
- 31 7.5Y4/4 褐色中砂
- 32 10YR5/1 褐灰色中〜細砂
- 33 2.5Y4/1 黄灰色細砂
- 34 7.5Y7/1 灰白色シルト〜粘土
- 35 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト〜粘土 φ3~6cm礫微量混 上部は鉄分沈着
- 36 7.5YR4/6 褐色粗砂 φ4~10cm礫混

堀1中層

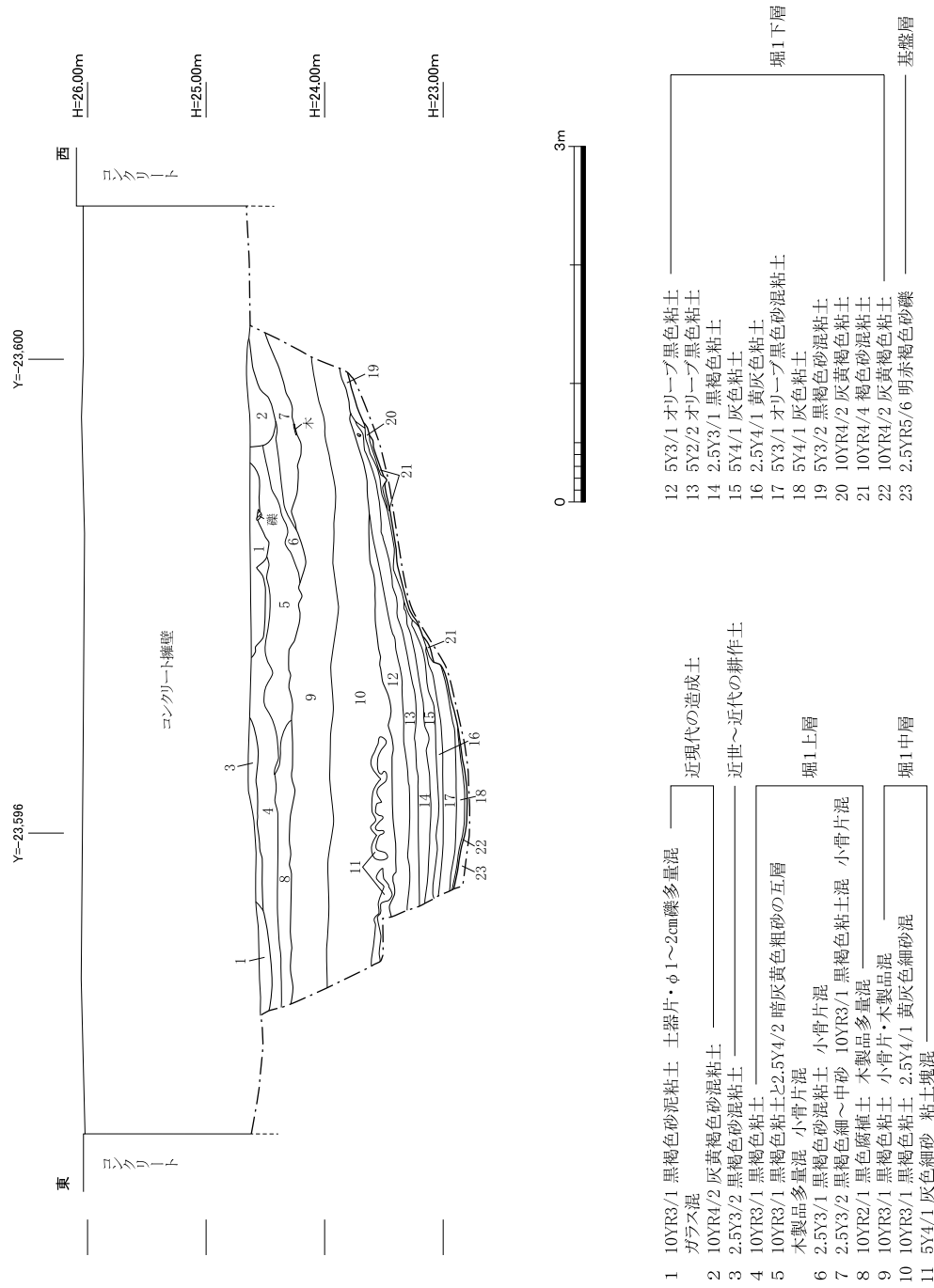
堀1下層

基盤層

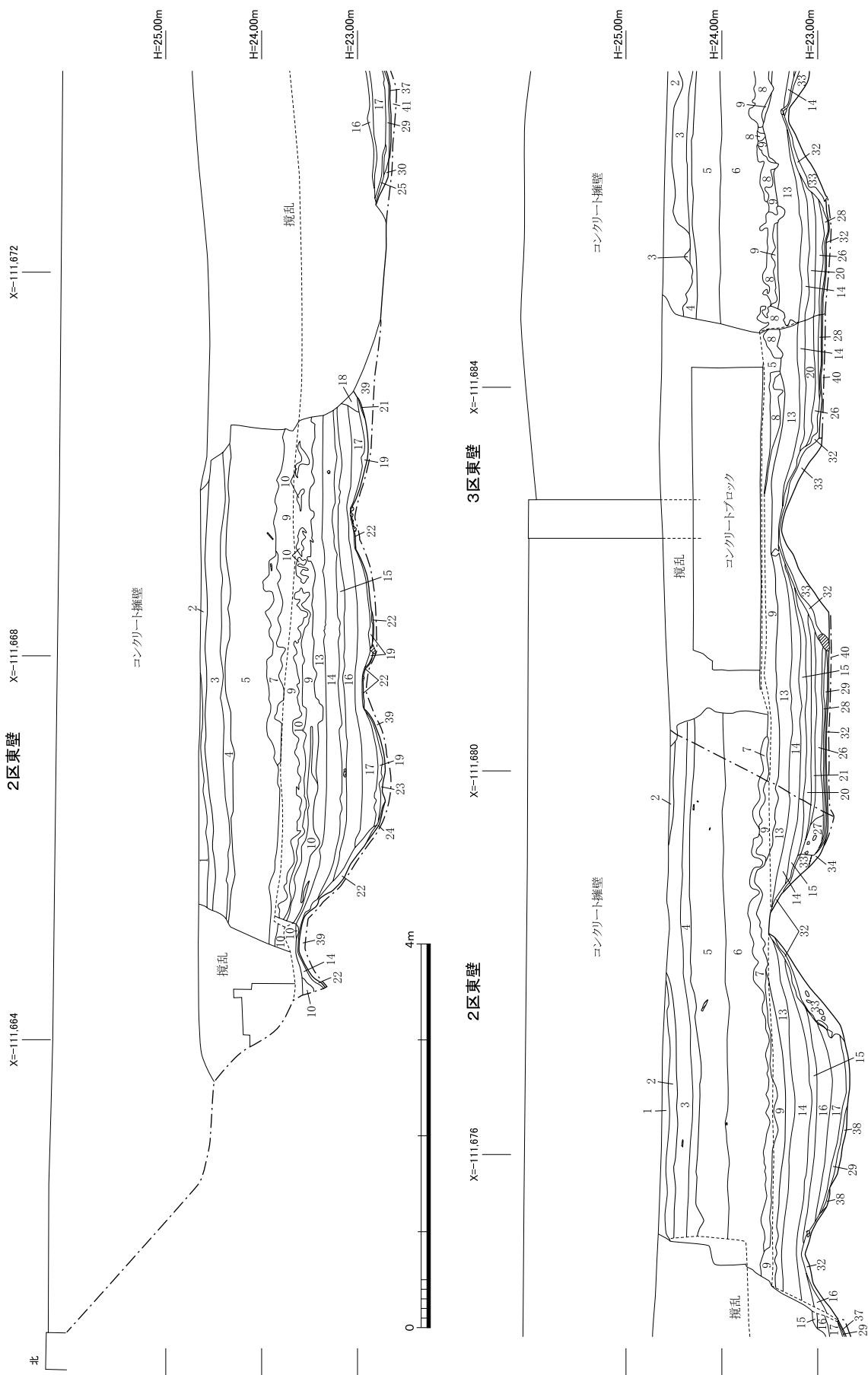
1 区北セクション断面図（1：60）

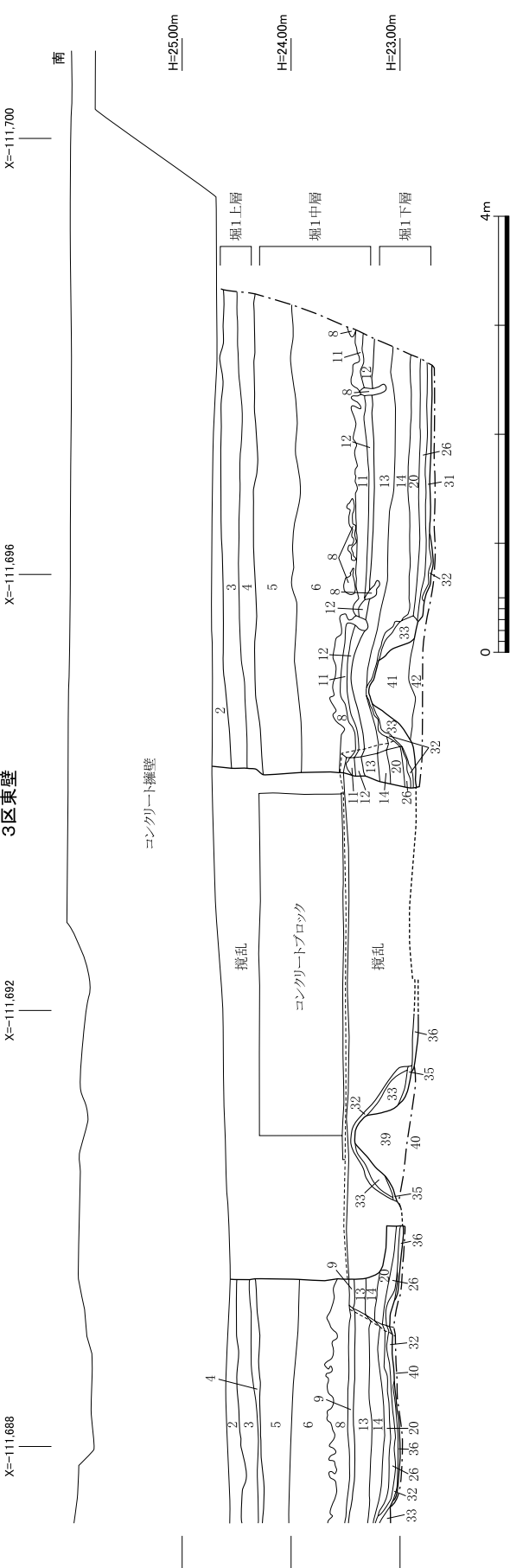


2 区南壁断面図（1：60）

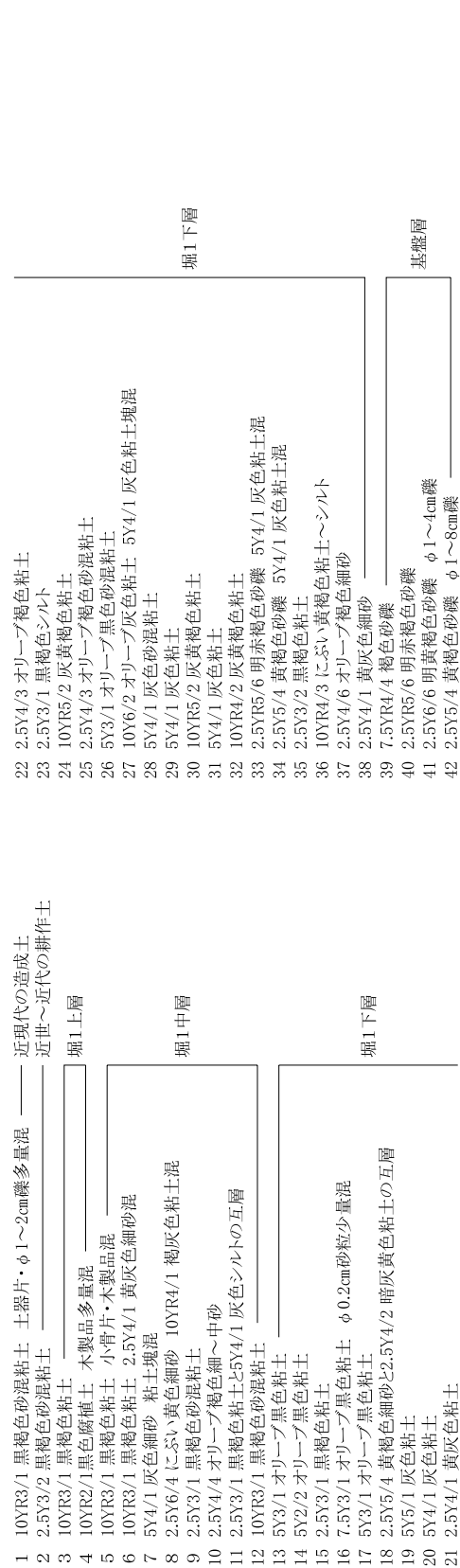


図版5
遺構



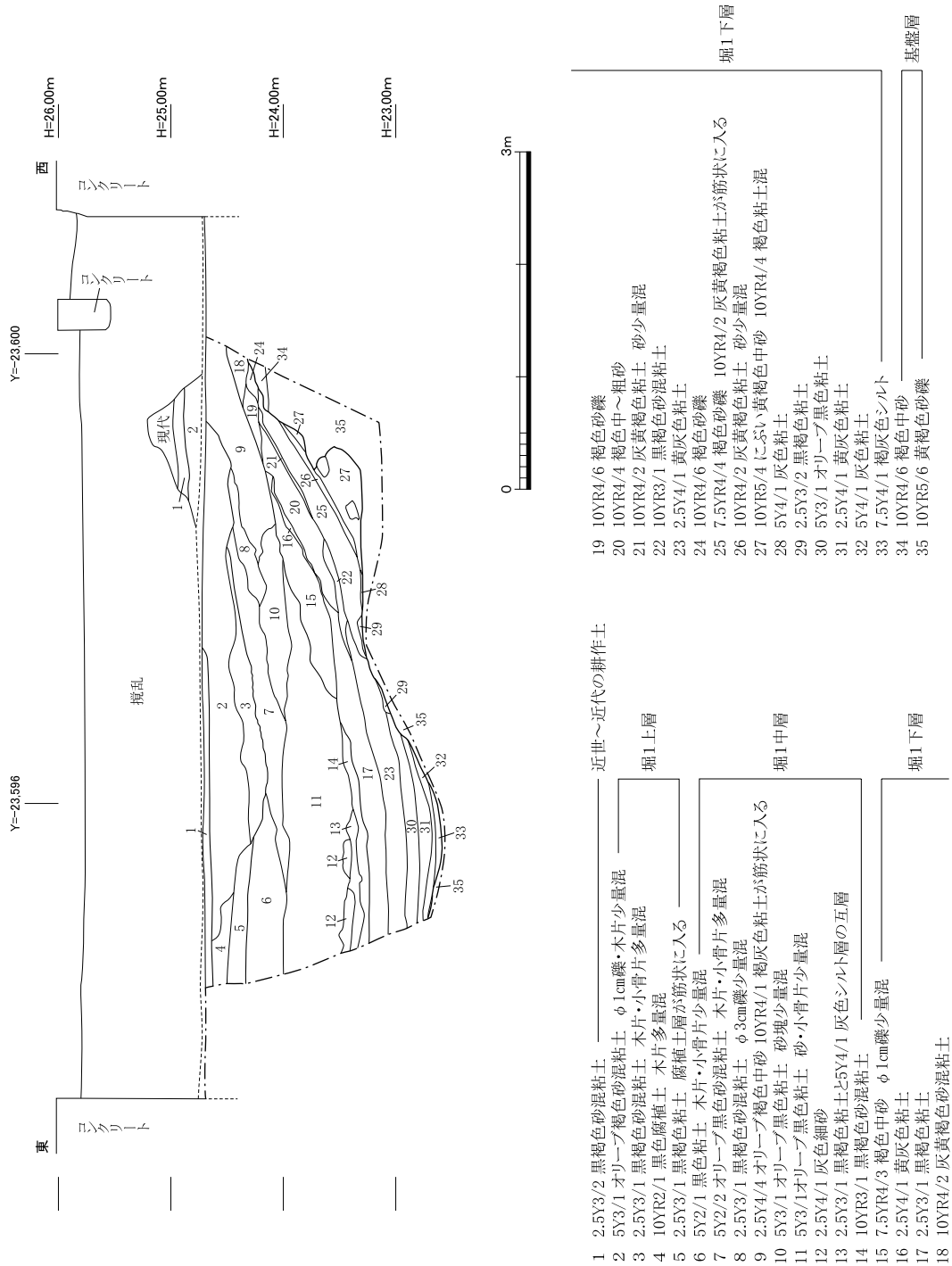


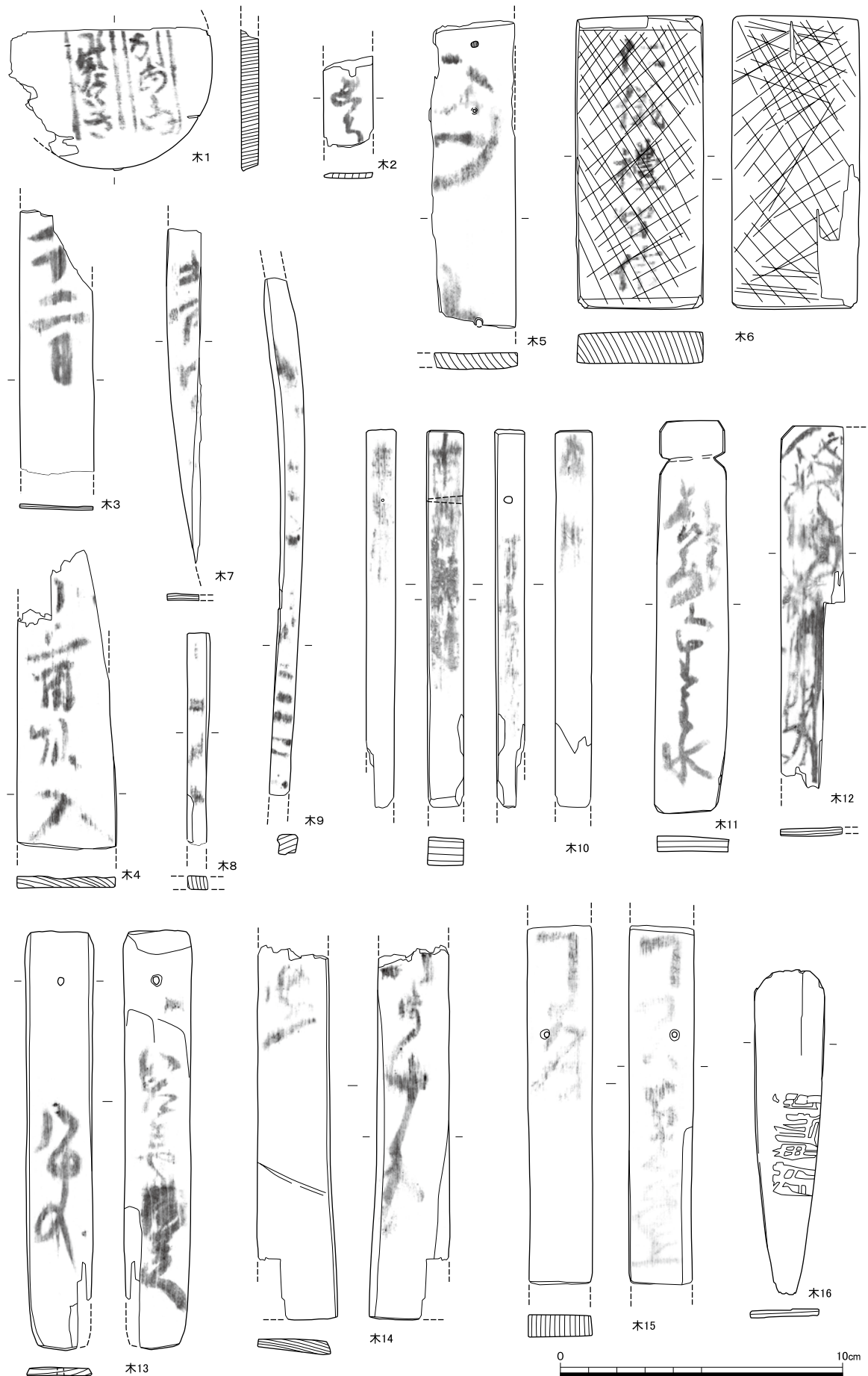
2区・3区東壁断面図2（1：60）



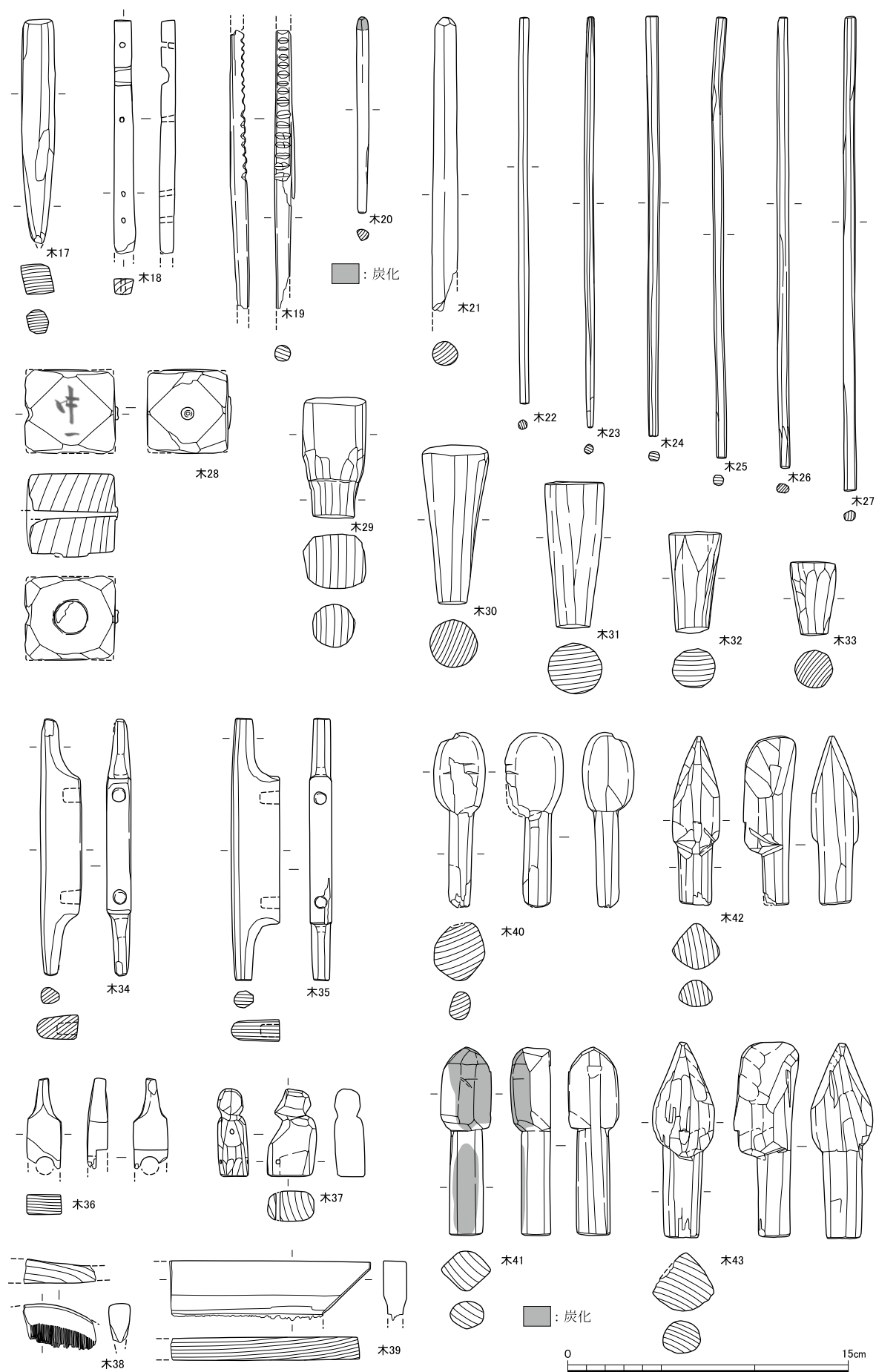
図版7 遺構

3 区南壁断面図（1：60）

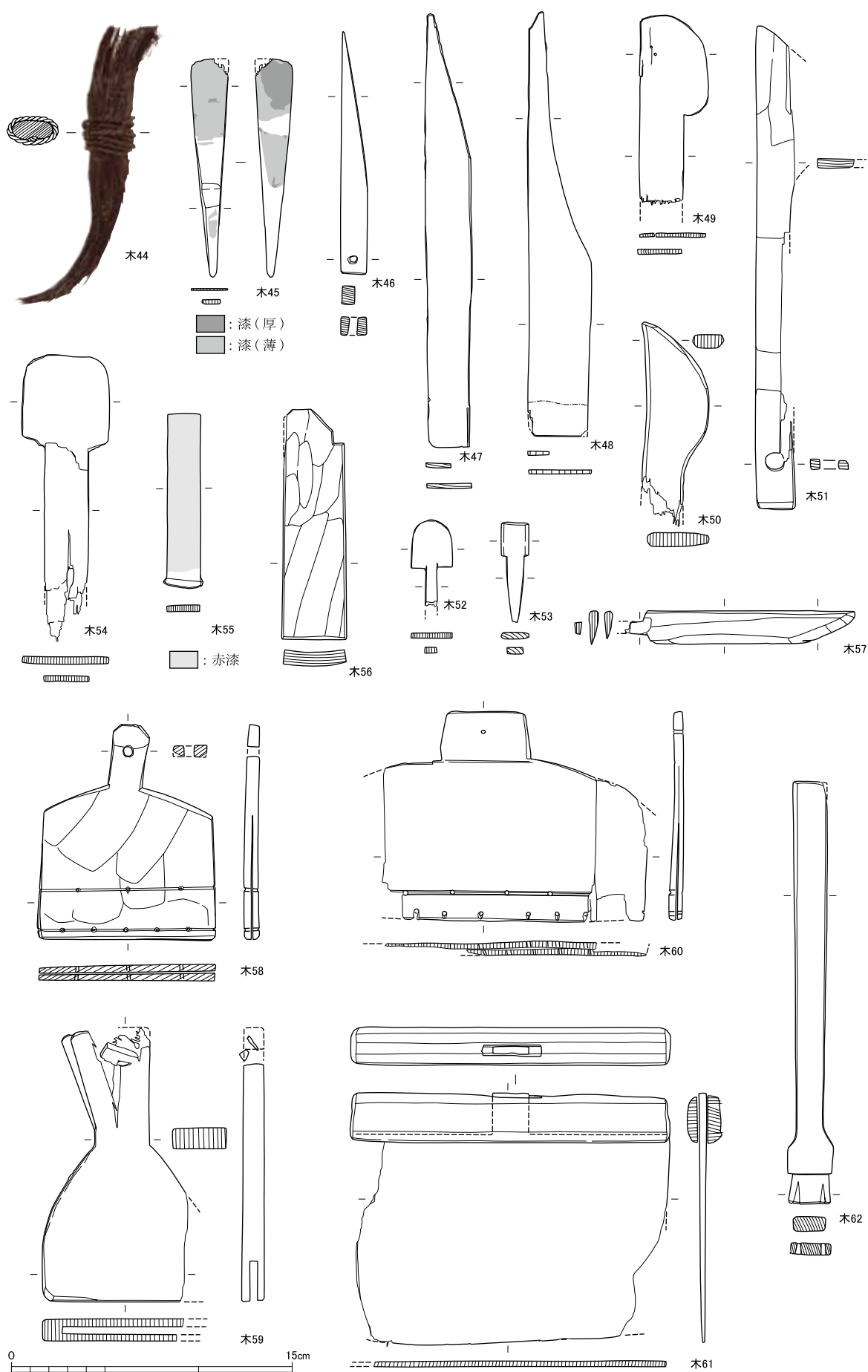




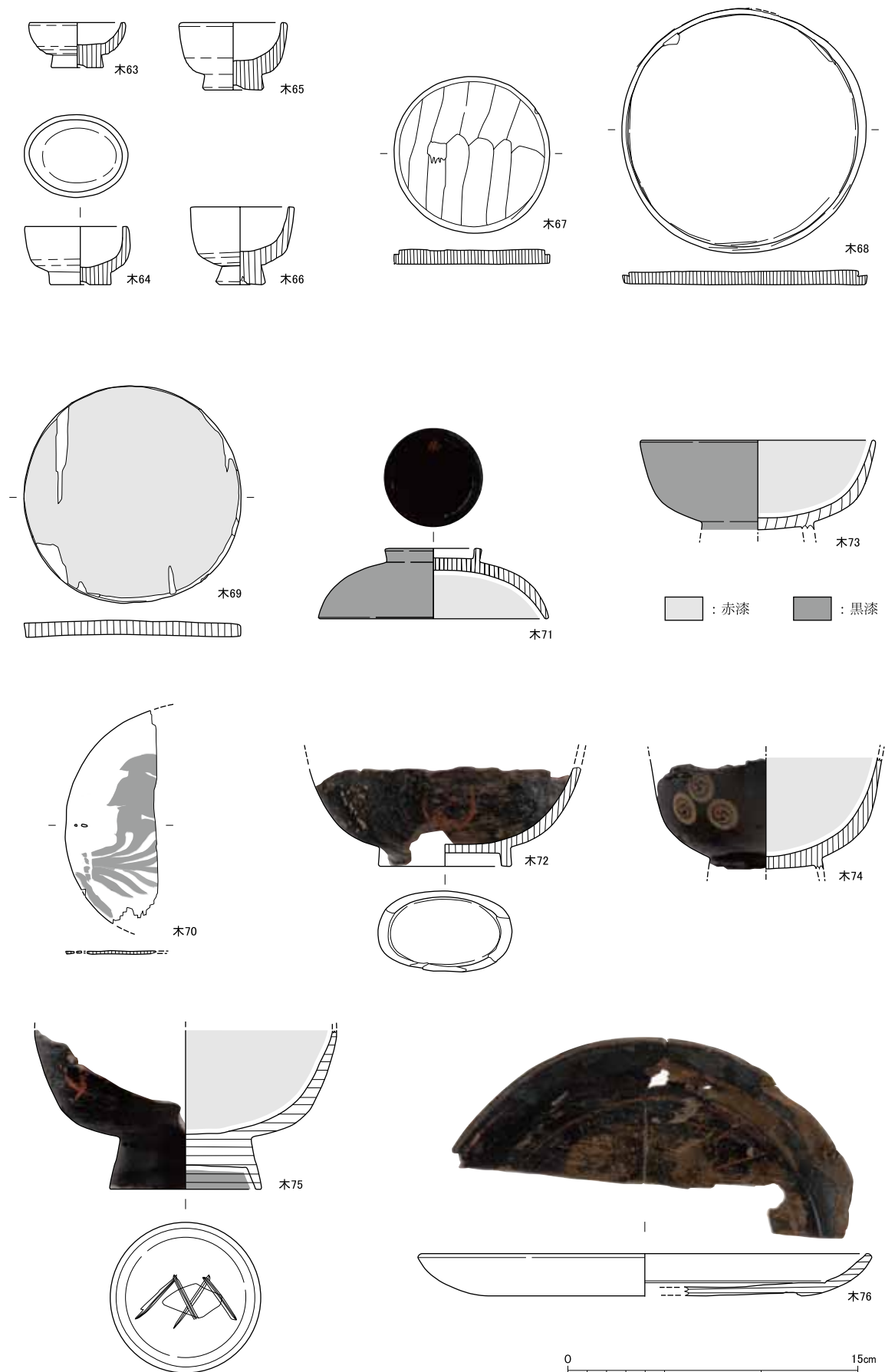
木製品実測図1 (1 : 2)



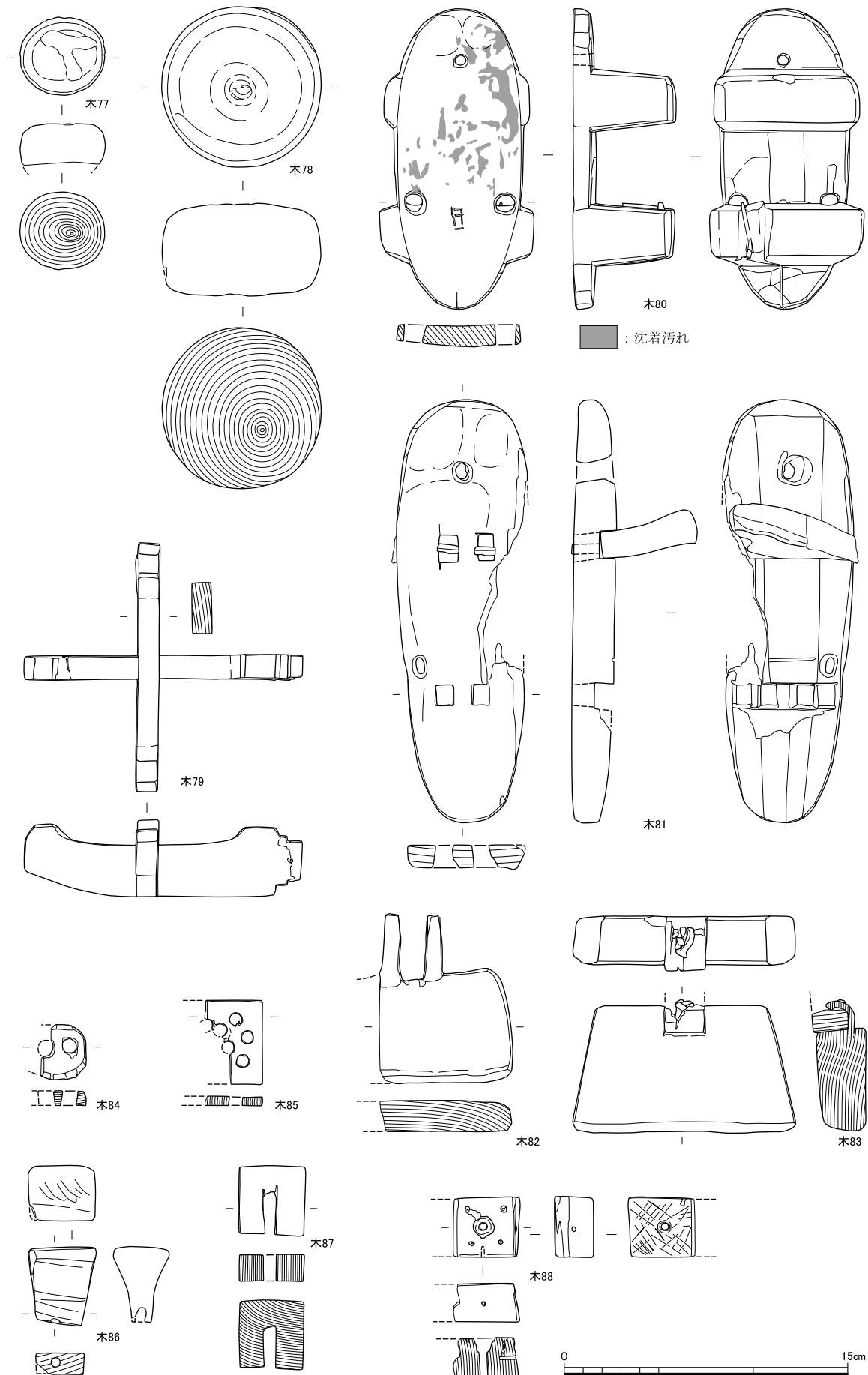
木製品実測図2 (1:3)



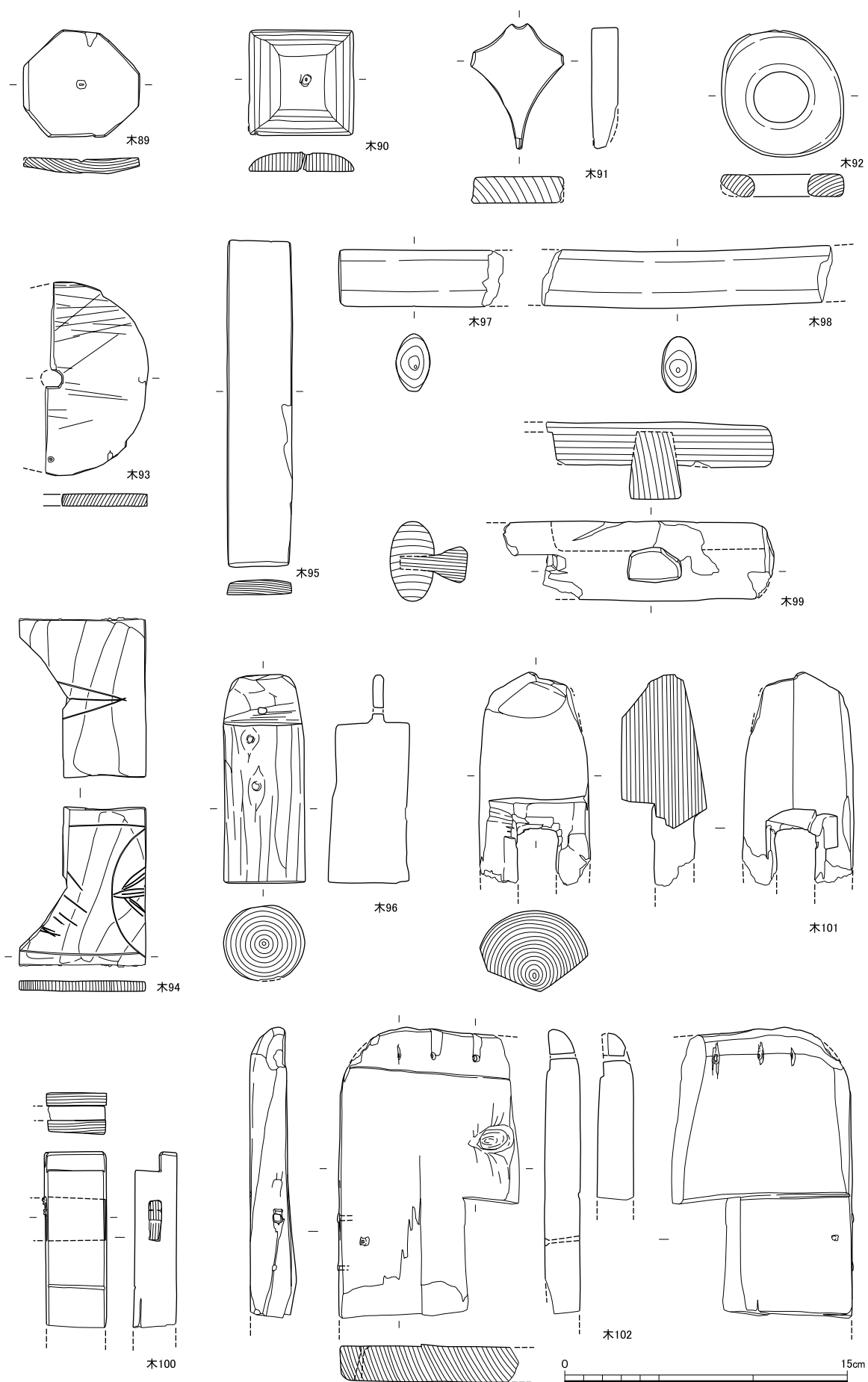
木製品実測図3 (1:3)



木製品実測図4 (1 : 3)



木製品実測図5 (1 : 3)



木製品実測図6 (1 : 3)



1 1区全景（北から）



2 1区畝状高まり（北東から）



1 1区北セクション断面（南から）



2 2区全景（北から）



1 2区畝状高まり（北西から）



2 2区畝状高まり（西から）



3 2区畝状高まり（西から）



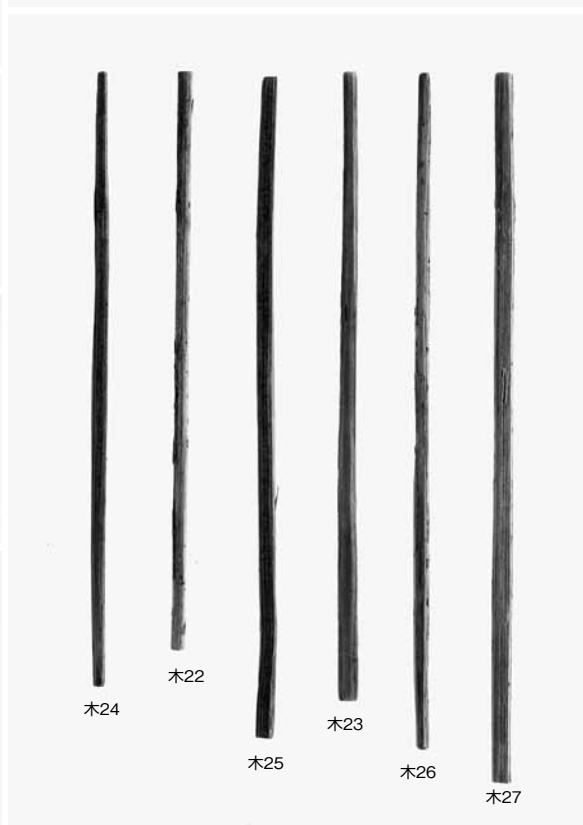
1 3区全景（北から）



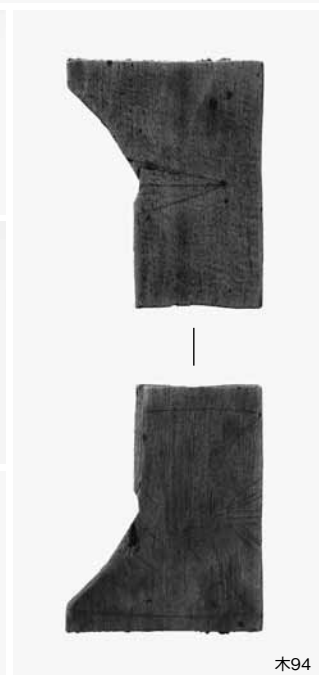
2 3区畝状高まり（西から）

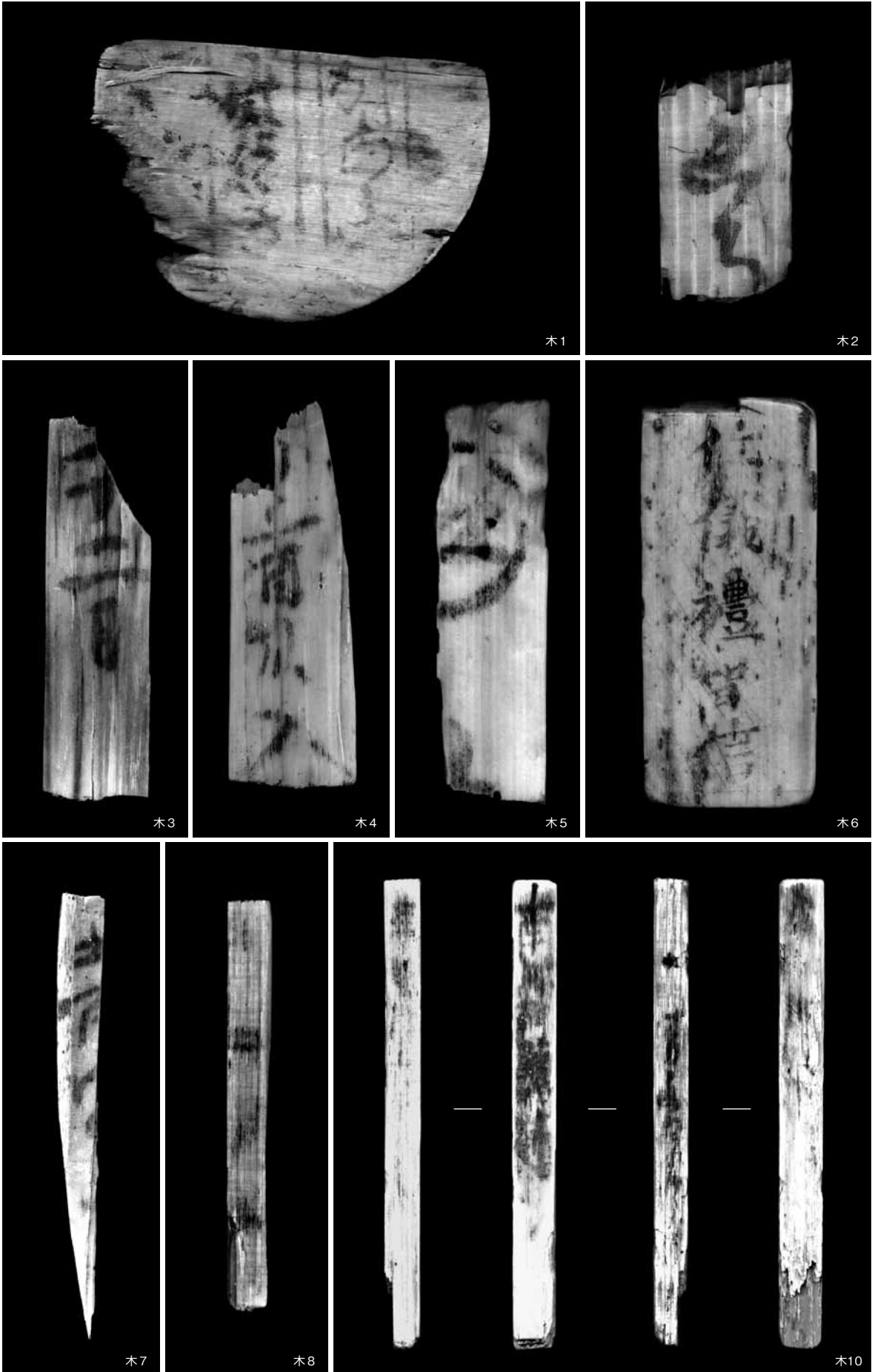


3 3区堀1西肩（北東から）

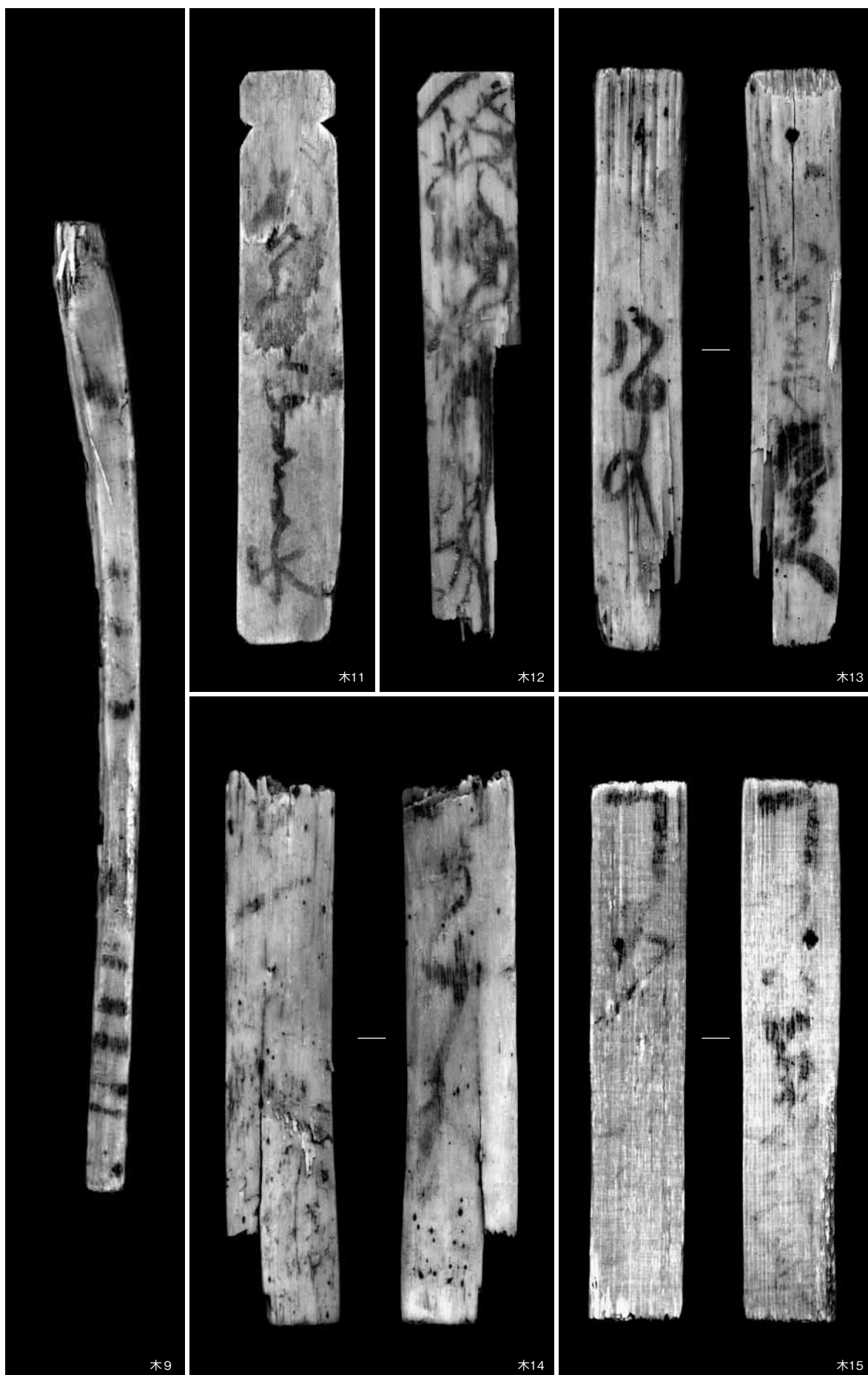


土器類・木製品 1





木簡赤外線写真 1



木簡赤外線写真2

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょううきょうななじょういちぼういっちょうあと・おどいあと							
書 名	平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 2 3 - 1 0							
編 著 者 名	小檜山一良・松吉祐希・岡田麻衣子							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2025年 2 月28日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 すじやくぶんきちょう 朱雀分木町19番 2 の一部	26100	1 149	34度 59分 37秒	135度 44分 29秒	2023年 9 月 25日～2024 年 1 月31日	583㎡	施設整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京跡	都城跡	平安時代			土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦類		御土居の堀を検出した。堀には東西・南北方向に畝状高まりがみられた。	
御土居跡	土塁跡	安土桃山時代～江戸時代	堀		土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、瓦類、木製品、金属製品、動植物遺存体			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2023-10

平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡

発行日 2025年2月28日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151